

平成 25 年度名古屋大学大学院文学研究科

学位（課程博士）申請論文

日本語とアラビア語の定性をめぐって

名古屋大学大学院文学研究科

人文学専攻言語学専門

モスタファ ヤスミン

平成 25 年 9 月

目次

序章.....	1
1. 冠詞を持たない言語の一つである日本語の研究の現状.....	1
2. 問題意識と論文の目的.....	1
3. 論文の流れ及び分析方法.....	2
4. 定性：一般的な概念についての導入.....	3
4.1 先行研究の見方.....	3
4.1.1 定性とは.....	3
4.1.2 Chesterman (1991).....	3
4.1.3 Hawkins (1978).....	6
第一章 アラビア語と日本語の定性標示について.....	11
1. アラビア語の定性標示について.....	11
1.1 アラビア語の定性.....	11
1.1.1 アラビア語の定・不定についての概要.....	11
1.1.1.1 定性標示の種類.....	12
1.1.1.1.1 人称代名詞.....	12
1.1.1.1.2 指示代名詞.....	14
1.1.1.1.3 関係代名詞.....	16
1.1.1.1.4 固有名詞.....	18
1.1.1.1.5 定冠詞「al-」.....	19
1.1.1.1.6 付属構造（属各関係）.....	19
1.1.1.1.7 定性の度合い.....	20
1.1.1.2 不定性標示の分類.....	21
1.1.1.2.1 一般的な不定性.....	21
1.1.1.2.2 指定的な不定性.....	22
2. 日本語の定性について.....	23
2.1 Wako Tawa (1993).....	23
2.2 庵功雄（1994）.....	25
第二章 指示対象の捉え方から見るソとアの使い分け.....	27
1. 概要.....	27

2.	先行研究による指示詞の機能.....	27
2.1	田窪・金水の心的領域に関する仮説の検証.....	28
2.1.1	対話者の談話への効率的な貢献.....	28
2.1.2	聞き手の存在と談話領域.....	29
3.	直接的情報・間接的情報による指示詞の選択.....	30
3.1	例文の再考察と仮説.....	32
3.2	考察.....	34
3.2.1	ア系列指示・ソ系列指示の使い分けに関わる状況.....	34
4.	結び.....	40

第三章 名詞句の「同定可能性」をめぐって

	—その適用と定性との関係—.....	41
1.	概要.....	41
2.	談話世界における指示対象の認識.....	41
2.1	指示対象の存在する領域.....	41
2.2	Familiarity（親密性）と指示対象の同定.....	43
3.	定名詞句・不定名詞句と同定との関係.....	44
3.1	指示対象を同定する領域.....	44
3.2	「限定性」は「定性」ではない.....	46
3.3	限定的な不定名詞句と同定可能性との関係.....	49
3.4	非限定的な定名詞句と同定可能性との関係.....	51
4.	結び.....	52

第四章 「文脈的照応」における日本語とアラビア語の「限定標示」

	—アラビア語の限定標示「al-」を中心に—.....	54
1.	概要.....	54
2.	「限定名詞句」の性質とその標示.....	54
2.1	照応とは？.....	54
2.2	アラビア語の定性標示について.....	58
2.2.1	定冠詞「al-+名詞句」の機能.....	58
2.2.1.1	照応的な用法（alṣahdiyya）.....	58
2.2.1.1.1	文脈的照応（alṣahdu ḍḍikri:）.....	59

2.2.1.2 総称的な用法 (aljinsiyya)	61
2.3 例文のデータの考察.....	62
2.3.1 結果の全体的概要.....	62
2.3.2 数と指示詞選択との関係.....	66
3. 結び.....	68
第五章 「観念的照応」における「裸名詞」と「あの+NP」の「定性」の 性質の違い	
—アラビア語を背景にした分析—.....	70
1. 概要.....	70
2. 「文脈的照応」と「外界照応」について.....	70
3. 「外界照応」に属する「観念的照応」の用法について.....	72
3.1 アラビア語の限定辞「al-」について.....	73
3.1.1 観念的照応の概要 (alṣahdu ḏḏihni:)	73
3.2 裸名詞が持つ様々な意味.....	76
3.3 「あの+NP」と「裸名詞」が表す定性の性質の違い.....	77
3.3.1 先行研究.....	77
Lyons (1999)	
Dik (1981)	
吉田 (2005)	
Givon (1983)	
Chafe (1976)	
3.3.2 考察.....	81
4. 結び.....	83
第六章 「定性」と「限定性」の相違点及び結論.....	85
1. 概要.....	85
2. 「文脈的照応」と「観念的照応」の意味機能.....	85
2.1 「文脈的照応」は指示的か、指定的か.....	85
2.2 「観念的照応」は指示的か、指定的か.....	87
2.3 「限定名詞句」と「定名詞句」の相違点のまとめ.....	87
3. 結論及び今後の課題.....	88
3.1 各章の概観.....	88
3.2 まとめと今後の課題.....	91

指示詞「ソ」「ア」の調査.....	92
コーパス 1.....	94
コーパス 2 (複数形)	102
謝辞.....	105
参考文献.....	107

序章

1. 冠詞を持たない言語の一つである日本語の研究の現状

「定性」という言語現象は、明確に標示する形態素を持つ言語もあれば、その標示を欠く言語もある。「定性」は、名詞句に冠詞があるかないかを考察することだという見解が定着していたため、日本語は後者の言語の一つであるとされてきた。従って、日本語において「定性」についての研究はあまり重視されず、進んでいないのが現状である。日本語の先行研究においては、「定性」、あるいは「話題の継続性」を表す方法として、「省略」及び「ゼロ代名詞」が挙げられていた（Wako 1993、堂坂 1994、Givon 1983 など）。また、指示詞による「定性標示」へのアプローチの研究はわずかであり、指示詞を包括的に分析したものは管見の及ぶ限り見当たらない。日本語は、冠詞を持たない言語であるとはいえ、「定性標示」がないわけではない。統語的な標示として働く冠詞がなくとも、場面に応じた適切な定性標示が用いられると思われる。本研究では、「指示詞」による定性標示を明らかにする。「指示詞」の性質や振る舞いを包括的に分析し、「定性標示」としての役割を明らかにした上で、それらが日本語の「定性標示」として定めることができる、ということを示すことを目的とする。

2. 問題意識と論文の目的

「定性標示」が整っている言語間で翻訳をする際、あるいは、「定性標示」を持つ言語の母語話者が他の「定性標示」を持つ言語を学ぶ際、戸惑うことなく「定名詞句」「不定名詞句」を断定的に区別することができる。しかし、日本語のような「定性標示」を持たない言語の場合は、それはそう簡単なことではない。「定性標示」が明白に決定されていないと、翻訳の際に困難が生じることは容易に想像でき、時には誤解を招くこともあり得るだろう。そこで、日本語の「定性標示」を決定する必要があると考える。本研究を通して明らかになる結果は、日本語の学習者の手助けにもなり、更に、これからの日本語の「定性」の研究の世界に新たな視野を開く道筋にもなることが期待される。

3. 論文の流れ及び分析方法

本研究では、冠詞を持たない言語である日本語の「定性標示」を考察し、明らかにすることが目的である。それを達成するために、冠詞を持つ言語の一つであるアラビア語を背景にしながら、日本語の「定性標示」を探っていく。世界の諸言語は、言語体系が異なっているにもかかわらず、ある程度の類似性があると考えられる。アラビア語と日本語は語族が異なるからこそ、それぞれの体系から推測される相関関係が、従来なかった新たな発想を導く可能性があると考えられる。

日本語の指示詞に定性標示として言及する先行研究（庵 1994、金水 1986 など）はあるが、指示詞のそれぞれの性質に基づいた定性標示としての役割の違いについて考察したものは見られない。本研究では、日本語の指示詞を中心に考察を行い、包括的な結果を導くことが目標である。本論文は六章から成り、次の順序で研究を進めていく。

まず第一章で、アラビア語の「定性」の体系を概観する。それから、日本語の従来の「定性」についての研究をまとめる。本研究は、日本語の指示詞を中心に行われるものであるため、第二章では指示詞のうち、主に指示形容詞「その」、「あの」が対照的なため、それらの性質や使い分けを考察する。第三章では、「定性」の決定に重要な一つ目の要因として、「同定」という概念を導入し、その定義、性質などを詳細に説明する。「定性」は、話し手と聞き手の間の共通知識に基づいてはじめて成立するものである。この共通知識には二種類がある。一つ目は、発話以前より話し手と聞き手の脳の中で蓄えられている了解済みの知識であり、二つ目は、談話が進行中にもたらされる知識である。それぞれが「同定可能」なものとして認識されるものの、同定の程度、同定する領域の範囲、また、同定に至るまでの過程がそれぞれ異なる。

「定情報」は全て「同定可能」な情報として認識されるが、「同定可能」な情報が全て「定情報」とは限らない。それを踏まえて、「定性」に加え「限定性」も扱い、この二つの用語は同義ではなく、異なる概念として扱うべきである、という提案をする。

「定性」は「観念的照応」、「限定性」は「文脈的照応」とそれぞれ関連付けて考察を行う。この議論に基づいて、第四章で「限定標示」、第五章で「定性標示」をそれぞれ詳細に論じる。最後に第六章で「定性」と「限定性」の相違点を示した上で、論文の全体的な結論をまとめる。

本研究では、アラビア語と日本語の両方を分析対象にする。アラビア語の定性標示を論考した上で、日本語に対応させてみる。様々な例文を分析することによって、両者の対応関係から「定性標示」の決定に役立つ結果を導く。

4. 定性：一般的な概念についての導入

4.1. 先行研究の見方

4.1.1. 定性とは

定性に関する研究は枚挙に暇がないが、そもそも定性とは何かという疑問については、厳密に定義することは難しい。何かを指して、これは定、あるいは不定と言っても、それがどういう意味かということには問題がある。また、認知的に、我々は実際どのようにしてあるものを定あるいは不定と認識できるのだろうか。更に、それを決定する基準は何かなどという多くの疑問が残されている。

4.1.2. Chesterman (1991)

Chesterman は、定性とは包括的な用語 (cover-term) であり、いくつかの対立する語を含んでおり、定不定は対義語ではなく、異なった性質の概念であると主張している。名詞は、それが表す内容が具体的に明白であり、同定可能なものであるかどうかにより分類される。しかし、「同定可能」とはいったい何かも説明すべきであると述べている。冠詞を持つ言語は、それによって定性を表すのだが、冠詞がない言語は他の多様な手段に頼ることになる。しかし、これらの手段はどのように働いているかという疑問も生じる。

‘Article’ (冠詞) という語はもともとギリシア語の ‘arthron’ から派生しており、ギリシア語では関係代名詞と人称代名詞を含んでいる。英語の場合は、冠詞 ‘a’ は数詞 ‘one’ の弱化した形式であり、また ‘the’ は指示詞 ‘that’ から派生したものであるということが知られている。定冠詞 ‘the’ は、「特定の対象に個性を与える」ために使用され、その対象はしばしば発話の前から頭の中に入っており、認識されているものを含意する。一方、‘a’ は「発話時に初めて指示される対象に伴う」という機能がある。Lowth (1762) は次のように述べている。”A substantive without any article to limit it is taken in its widest sense” (Lowth 1762: 15ff.: quoted in Michael 1970: 361 quoted

in Chesterman 1991: 5)。また、名詞の意味の範囲がどこまで及ぶかということが、前に置かれる冠詞で示されると述べている。つまり、英語の場合は、名詞の前に冠詞がないと、その名詞は広い意味で捉えられると述べている。

Chesterman は、定不定の従来の定義について次のように述べている。

“A definite NP has a referent which is assumed by the speaker to be unambiguously identifiable by the hearer (in brief, a known or identifiable referent); and an indefinite NP has a referent which is assumed by the speaker not to be unambiguously identifiable by the hearer (i.e. a new, or unknown, referent)” (p. 10).

つまり、定不定は、談話の参加者である話し手と聞き手と密接に関わっている。話し手は、談話の管理者として聞き手に向かって発言する際に、聞き手の知識を常に念頭に入れておかなければならない。情報が定であれ、不定であれ、聞き手に正確に届くことが談話管理理論の原則である。すなわち、話し手が符号化 (encode) した情報が聞き手側から正確に解読 (decode) されるというのは、話し手が談話の管理に成功したことを意味し、成果のある会話を導かせるのである。

Chesterman は、彼以前の研究者にも触れている。Russell (1905) は、単数可算名詞について、例えば、“the king of France” のような「定名詞句」は、その指示対象が存在しており、唯一であると断定している。Strawson (1950) は、「定名詞句」の使用には、指示対象の存在と唯一性が前提となっていると主張している。同様に、Searle (1969) は、「定名詞句」が正しく使われるには、二つの原則 (axioms) がなければならないと述べている。それらは、

Axiom of existence: there must exist one and only one object to which the speaker's utterance of the expression applies.

Axiom of identification: the hearer must be given sufficient means to identify the object from the speaker's utterance of the expression. (Searle 1969: 82 quoted in Chesterman 1969: 11)

存在の原則：話し手の発言に当てはまる対象は一つだけ存在しなければならない。

同定の原則：聞き手が話し手の発言から対象を同定できるように、十分な手段を与えられなければならない。

と *Chesterman* で記述されている。

ここで、同定 (*identify*) という用語が手がかりになっている。例えば、”*I have no idea who **the** author is*” のような例では、*author* の前に定冠詞 *the* が置かれている。しかし、ここでの定冠詞の使用は、この *author* の名前を求めるために使用されているのではない。話し手が指している *author* は、何冊もの本の中で、どの本の執筆者、ということを知りも同定していることを意味する。つまり、話し手の、聞き手が指示対象を同定できる能力を持つという判断によって、定冠詞の使用が適切になると述べている。更に、定冠詞は、「属性的用法」 (*attributive use*)¹ で使われる場面もあると述べている。

(1) *The murderer of Smith must be insane.*

スミスを殺した奴は、精神異常者に違いない。

この例は、「属性的用法」でも「指示的用法」でも解釈可能な例である。「指示的用法」の解釈であれば、話し手も聞き手もこの殺人犯を知っており、殺人犯は二人の間に共通の知識として認められていることを意味し、聞き手に指示対象は誰かということ指定するように求めている。一方、「属性的用法」と解釈する場合は、定冠詞は特定の人物を指さないで、「非指示的用法」である。ところが、スミスが殺されたという事実は、話し手と聞き手との間に共通の知識になっており、殺されたからこそ、殺人犯がいることが前提とされる。そのため、この例における定冠詞の役割は、その殺人犯自体を指定するのではなく、スミスを殺した殺人犯の属性を聞き手に同定させることにある。

¹‘*Attributive use*’ の訳語である「属性的用法」という用語は、西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』 p.66 から借用した。

Chesterman は Christophersen (1939) にも触れている。Christophersen は、'the' を「親密性」(familiarity) と結びつけている。定冠詞 'the' の使用は、その語の潜在的な意味と以前に獲得された知識との幾分かの結合・連合を引き起こすと述べている。ところが、定冠詞'the' を伴った名詞は、常に直接的な経験に基づいて知られているわけではなく、間接的に認識される場合も多い。例えば、話し手と聞き手が二人の間になじみのある本について話しており、その本の筆者を 'the author' と定冠詞で呼んでも、その筆者を二人が直接知っているわけではない。ところが、全ての本に筆者が存在するということは誰もが知っている前提であるため、'the' が伴うことによって、その本と 'the' で呼ばれたものとの間に何らかの明快な関係があることを意味する。Hawkins (1978:100) は、これを「連想の関係」(associative relationship) と呼んでいる。また定冠詞は、必ずしも限定された指示対象を伴うわけではない。同様に、不定冠詞は常に、非限定の指示対象と現れるわけではないと述べている。Hawkins (1978) でもそれと同様のことが述べられている(4.1.3 で詳細に触れる)。

4.1.3. Hawkins (1978)

Hawkins は、母語話者が文を文法的であると判断する際に、二種類の意味的な判断に従う、としている。一つ目は、特定の形態素や構造をいつ使えばいいか、また、それらを実際に使うと、どういう意味になるかということ判断するものである。次の例を見てみよう。

- (2) Fred was discussing an interesting book in his class.
- (3) I went to discuss the book with him afterwards.

例(2)は初めて発言される不定名詞句(first-mention indefinite description)であり、例(3)は二番目に発言される定名詞句(second-mention definite description)であることを、母語話者は直感で判断する。それに加え、例(3)で「定冠詞+名詞」という限定的な形が現れると、'the book'は先行する不定の記述である'an interesting book'を指示するということが分かる。

また、定冠詞と指示代名詞の関係についても述べている。指示代名詞は定冠詞の代わりに使われ、同じ役割を果たす場合もあれば、代用できない場合もあると述べている。

- (4) Fred was discussing an interesting book in his class.
- (5) I went to discuss this book with him afterwards.

例 (5) では、指示代名詞が定冠詞の代わりに使用され得る。

- (6) Fred was discussing an interesting book in his class.
- (7) He is friendly with this author.

一方、例 (7) では、指示代名詞の使用は適切ではない。なぜなら、'this author' は必ずしも 'an interesting book' の author を指すわけではなく、他の本の著者も指す可能性があるからである。

Hawkins は、様々な形態素の意味的な違いは、それぞれが表す発話行為の観点からか、もしくは、それらが求める世界の性質に関する様々な要求によって説明されうると述べている。彼は後者を「論理的な意味」(logical meanings)と呼んでいる。限定詞は、発話行為と論理的な意味とが関連した形でその意味を説明されなければならない。語用論的な状況から抽象されて説明されたり、発見されたりすることは不可能なことであることを示唆している (pp.: 88-89)。

Hawkins は、ラッセルの定記述の説 (Russell's theory of definite description) にも触れている。このラッセル説を以下で説明する。

- (8) The king of France is wise.

ラッセルはこの文を論理的に解釈するために、三つの命題に分ける。それらのうちの二つが定記述 “the king of France” の機能を表すものであり、三つ目が述語 “is wise” と関連している。これらの三つの命題は次のように言える。

- (9) There is a king of France.
- (10) There is not more than one king of France.
- (11) This individual is wise.

(9) は「存在」を要求する。つまり、定記述の対象が実際に存在するということである。(10) はこの個人の「唯一性」を要求する。(11) は述語がこの唯一、存在している個人に当てはまることを要求する。これらの三つの命題が真であると、(8) も真になる。しかし、(9) (10) のいずれかが偽であれば、(8) も偽になる。ラッセルは、(8) を記号で表現し、King of France を K で、wise を W で表した。

- (12) $(\exists x) (Kx \& (\forall y) (Ky \supset y = x) \& Wx)$

すなわち、x が存在し、その x は king of France である。他の存在物である y が king of France であれば、y と x は同一のものになり、x は wise になる。

定冠詞のこの唯一性は、定性の意味を理解するために根本的な概念であると述べている。

また、Hawkins は、Strawson のラッセル説に対する議論にも触れている。Strawson はラッセル説を批判した。ラッセルの分析は、英語の定冠詞の正確な意味を描写しておらず、不十分であると述べた。なぜなら、定冠詞が単数可算名詞の前に置かれた場合のみに焦点を当てていたからである。複数形や不可算名詞はめったに唯一の個人を指示しないのにも関わらず、それらの前にも定冠詞が置かれるのである。

更に、Searle (1969) にも触れ、Searle は次のように述べている。

A fully consummated reference is one in which an object is identified unambiguously for the hearer, that is, where the identification is communicated to the hearer. But a (definite) reference may be successful – in the sense that we could not accuse the speaker of having failed to refer – even if it does not identify the object unambiguously for the hearer, provided only that the speaker could do so on demand. (Searle, 1969, p.82 quoted in Hawkins p. 96)

ここで Searle は二種類の言及の方法を区別している。完全な言及 (consummated reference) では、指示対象が聞き手に明確に同定されている。一方、成功した言及 (successful reference) では、指示対象が聞き手に同定されない可能性があるが、この場合でも、求めに応じて指示対象を示すことができれば、話し手が非難されることはない。この場合は、不定冠詞を使うべきであると Hawkins は説明している。

Searle の言う「定」言及 (definite reference) の妥当な条件として、Hawkins は (hearer orientation) 一すなわち、話し手が何かを指そうとする際に、聞き手が持っている想定される様々な知識や情報をいつも念頭に入れなければならない—という概念が必要であると指摘している。これを欠くとコミュニケーションがうまくいかないと記述している。

更に、Searle によれば、定記述においては、聞き手が対象を同定できるように、十分な手掛かりを与えられなければならない。「同定」とは、話から曖昧さ、疑わしさなどがなくなり、疑問の全てに答える記述であることと説明している。

以上の先行研究をまとめると、次のことが言える。定冠詞を伴う名詞は必ずしも直接的に認識されているものでなければならないということではない。指示対象が直接的に知られていなくても、聞き手の知識の中の人物や出来事などになんらかの関連があり、聞き手がその指示対象を知識の中のものに結びつける能力があると話し手が判断した場合、定冠詞が使われる。これを、「連想の関係」という。この場合、聞き手が指示対象を直接的に知らなくても、ある程度の知識を持っているということになる。更に、定冠詞の使用には、「存在」「唯一性」「親密性」が不可欠な条件となっているということが述べられている。ところが、定冠詞は以下の三つの状況下でも用いる

ことができると述べられている。一つ目は、指示対象が発話時点の前から話題になっており、それについて話し手と聞き手がかなりの情報を持つ場合である（共通知識）。二つ目は、指示対象がより一般的な知識として認識される場合である（世界についての百科事典的知識）。三つ目は、指示対象について以前の知識がない「非限定的な」対象の場合である（Searle が言っている「成功した言及」(successful reference)）。更に、定冠詞 ‘the’ は指示代名詞と置き換え可能な場合もあれば、そうでない場合もある。

定冠詞が「非限定的な」指示対象と現れる場合もあるということについては、再検討が必要であると筆者は考える。このことについては、第三章で触れる。

以上の先行研究の様々な提案や検討を参考にしながら、日本語の「定性標示」と呼ばれても良いものを考察していく。更に、「同定可能性」「定性」「限定性」のような用語を定義した上で、それぞれが使用される条件を決定する。語用論的、意味論的な側面から包括的な分析を通して信頼できる結果を導く。

名詞句の「同定可能性」を扱う前に、次章では、本研究の対照となる指示詞、とりわけ「その」と「あの」の使い分けを考察する。

第一章

アラビア語と日本語の定性標示について

1. アラビア語の定性標示について

1.1. アラビア語の定性

アラビア語はセム語族の言語の一つであり、22ヶ国で公用語として使われている。アラビア語はコーラン（クルアーン）の言語として昔から神聖化され、世界の国々で文法的な分析などの分野で注目されていた。それにもかかわらず、日本では、アラビア語についての研究はまだ進んでおらず、数も少ない。特に、アラビア語・日本語の対照研究は少ない。筆者は、アラビア語母語話者の日本語学習者として、本論文を通して、この二つの言語における定性のあり方に焦点を当てたい。本章では、アラビア語の定性標示を概観してから、日本語の定性に言及した先行研究に触れる。

1.1.1. アラビア語の定・不定についての概要

定・不定は、我々が見るものに対する未知・既知という概念に関係付けられる。アラビア語の辞書では、定が不定の反対、また不定が定の反対、定性が不明なことを説明すること、などの説明がなされている¹。定不定の違いについては、定性が解明、真相、本質に関係付けられ、これらはすべて意味と関連し合っている。一方、不定性は不明、真相の未知に関係付けられ、定性とは異なり、正確さが欠如している。イブン・ヤイーシュという言語学者の説明では、定性は聞き手の情報量と関わっており、話し手とは関係ない²。話し手には知られている情報や人物であっても、聞き手には知られていないとすれば、不定になる。それは、定であれ不定であれ、談話の元来の役割は、聞き手に意味を届けることにあるからである。一方、他の言語学者は不定性について、「定性マーカーとしての al-」を受け入れ、定性マーカーに左右され得るもの

¹ “Alqamus Almuhit” (1952), “Lisan Al’arab” (Dar Alma’aref の出版年号は記載されていない) などの辞書である。Afifi (1992:18) を参照。

² Afifi (1992:20) で述べられている。

であると言っている³。また、固有名詞に「al-」が付加される場合もあり、その場合、この固有名詞が不定であることを意味し、固有名詞が表す定性の程度の低さを指摘する⁴。

ここで重要なのは、定不定の間で形式的な区別が著しいとはいえ、例外もあるということである。そのため、定不定を決定する際、もっぱら形式のみにこだわると、正確な判断に至らないのである。ある語は意味的に定であり、形式的に不定であるという場合もあれば、他の語は意味的に不定であり、形式的に定であるという場合もある。そこで、形式のみならず、意味も定不定を判断する際に重要な役割を果たしていると言ふべきである。

次に、アラビア語の定性・不定性を詳細に説明する⁵。

1.1.1.1. 定性標示の種類

定性は名詞の意味を限定する方法であると考えられる。アラビア語の定性にはいくつかの種類があり（以下で詳しく紹介する）、独立した形で定性を表すものもあれば、名詞の前後に付加される拘束形態素で定性を表すものもある。

定性標示の種類は、人称代名詞、指示代名詞、関係代名詞、固有名詞、定冠詞「al-」、付加構造（属格関係）⁶の六つである。以下で、それぞれを具体的に説明する。

1.1.1.1.1. 人称代名詞

人称代名詞には、独立した形式と拘束形態素の二種類がある。性、数により、形式が異なる。独立した形式は、一人称、二人称、三人称の三つに分類される。

一人称単数の代名詞の指示対象は話し手であり、話し手自身によって直接認識される。一人称複数の代名詞は、話し手とその他の誰か（聞き手も含まれても良い）を指し示す。

³1.1.2 節で詳しく触れる。

このことは、Afifi (1992) で言及されているが、言語学者の名前は書かれていない。

⁴固有名詞は定を表す一つの方法であるとはいえ、定性を表すものの中で、最も程度が低いと考えられている。後ほど詳細に記述。

⁵定性はアラビア語で「アルマーリファ」と言い、複数形は「アルマーアーリフ」と言う。不定性は「アルナキラ」と言い、複数形は「アルナキラトゥ」と言う。

⁶付加構造（属格関係）は英語で、the "genitive construct", the "construct phrase", or "annexation structure"といい、アラビア語では、イダーファ (ida:fa) という。

二人称単数の代名詞の指示対象は聞き手であり、話し手が聞き手に向かって、話しかけてはじめて談話が成立する。

三人称の代名詞の指示対象は、話の現場に存在しないが、先行の文脈や共通の知識から特定できるのが一般的である。

二人称、三人称の代名詞には、単数、双数、複数の三つの形式があるが、一人称は単数、複数の二つの形式のみを持っている。以下の表 1 に独立した形式をまとめる。

表 1

人称	単数		双数		複数	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
一人称	ana:	ana:			nahnu	nahnu
二人称	anta	anti	antuma:	antuma:	antum	antunna
三人称	huwa	hiya	huma:	huma:	hum	hunna

また、語尾に付加される拘束形態素としての拘束人称代名詞もある。拘束人称代名詞は属格関係を表し、所有者の性、数と一致する。また、三人称の場合のみ、拘束人称代名詞が付加されている名詞は、対格か属格かによって、拘束代名詞も格変化を示す。対格の場合は拘束代名詞が「-hu」となり、属格の場合は拘束代名詞が「-hi」になる。このことを以下の表 2 にまとめる。

表 2

人称	単数		双数		複数	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
一人称	-i:	-i:			-na:	-na:
二人称	-ka	-ki	-kuma:	-kuma:	-kum	-kunna
三人称	-hu, -hi	-ha:	-huma:, -hima:	-huma:, -hima:	-hum, - hi	-hunna, -hinna

人称代名詞自体に意味はないが、文脈中、特定の人物や事柄を指してはじめて意味が生じる。話し手が聞き手に向かって、特定の人物や事柄について話しかけ、聞き手がその指示対象を同定できると話し手が判断したら、その名詞が代名詞化される。このことから、代名詞は定性を表す一つの方法であるといえる。

1.1.1.1.2. 指示代名詞

指示代名詞は、名詞を伴うか、名詞に代わり、話し手からの物理的・心理的な距離の近・遠を示す限定詞である。指示代名詞は目と知覚で同定されるといえる。指示対象が目で認識される場合は「感覚指示」と言われ、指示対象が現場にいるのが原則である（現場指示に相当）。また、指示対象が知覚で認識される場合は「抽象的指示」と言われ、指示対象は、感覚的にも抽象的にも存在可能である（文脈指示に相当）。

(1) **ha:ðihi** l-fata:t-u

This DEF-girl-NOM

この女の子は…

この指し方は現場に存在する女の子に対して使われる。対して、

- (2) **tilka** l-fata:t-u
 That DEF-girl-NOM
 あの女の子は…

ここで、指示対象は現場におらず、知覚で認識されている。

アラビア語の指示代名詞は近・遠の二系列の範疇があり、聞き手の指示対象に対する知識を考慮しながら指示代名詞を用いる⁷。

「近」の指示代名詞は、性、数、及び格変化（格変化は双数の場合のみで、主格の位置にある場合は真ん中の母音が「a:」となり、対格または属格の位置にある場合は真ん中の母音が「ay」となる）を示すのに対し、「遠」指示代名詞は性と数のみによって屈折し、格変化はしない。指示代名詞には、生物・無生物と場所の二種類がある。

以下の表 3 に生物・無生物の代名詞をまとめる。

表 3

数・性	「近」を表す指示代名詞	「遠」を表す指示代名詞
単数・男性	ha:ða:	ða:lika / ða:ka
単数・女性	ha:ðihī / ha:ði:	tilka
双数・男性	ha:ða:ni / ha:ðayni	ðalikuma:
双数・女性	ha:ta:ni / ha:tayni	tilkuma:
複数・男性と女性	ha:ʔula:ʔi	ʔula:ʔika

遠を表す指示代名詞の双数形が使われることはまれである。

⁷学校でも教科書でもアラビア語の指示代名詞は 2 系列であることを学び、母語話者であってもこの二種類の概念しか持たない。しかしながら、近・遠のみならず、近・中・遠という三系列の指示代名詞に触れている参考文献もある。実際に使われるのは、近・遠の指示代名詞がほとんどであるため、今回は中称の代名詞には触れないことにする。

表 4 に場所を表す代名詞をまとめる。

表 4

近い所	遠い所
huna: / ha:huna:	huna:ka / huna:lika / thamma / thammata

1.1.1.1.3. 関係代名詞

関係代名詞自体には特定の意味がなく、その意味は文の中で明確にされる。後続する名詞句、動詞句、前置詞句のいわゆる関係節により先行詞を限定する役割を果たす。つまり関係代名詞は、関係節と主節とを関連づける働きを果たしている。

- (3) fariha **allaði:** najaha fi l-imtaha:n-i
was happy REL.PRO. passed in DEF-exam-GEN
試験に合格した者は喜んだ。

関係節を正しく使うにはいくつかの条件が満たされていなければならない。それらは、

- ア. 話し手は、聞き手が関係節の意味を知っていることがあらかじめ分かっているなければならない
- イ. 関係節は平叙文でなければならない
- ウ. 関係節に人称代名詞が含まれ、この人称代名詞は先行の関係代名詞に言及してなければならない。

関係代名詞には二種類ある。個別関係代名詞と共通関係代名詞と呼ばれるものである。その違いは、前者には性、数に応じて異なった形式の単語があるのに対し、後者は性、数を問わず、全ての状況に使って差し支えない。前者は次の表 5 にまとめる。

表 5

数	性	
	男性	女性
単数	allaði:	allati:
双数	allaða:ni allaðayni	allata:ni allatayni
複数	allaði:na	alla:ti: / alla:ʔi:

以上の表 5 からわかるように、双数形のみが統語的な格変化を示す。関係代名詞は主格の位置にある場合は真ん中の母音が「a:」となり、対格または属格の位置にある場合は真ん中の母音が「ay」となる。次に、後者の関係代名詞を表 6 にまとめる。

表 6

関係代名詞	人間（性、数関係なし）	非人間（性、数関係なし）
man	○	×
ma:	×	○
al	○	○
ðu:	○	○
ða:	○	○
ai	○	○

この表で示されているように、man と ma: だけが人間と非人間の区別で使い分けられるが、残りの関係詞はその区別を問わずに使用される。

1.1.1.1.4. 固有名詞

固有名詞は、その指示対象を絶対的に、唯一的に決定するものである。固有名詞が最も特定のであり、それ以上に特定のなものはないという意見がある。固有名詞には二種類がある。一つ目は、「個別の固有名詞」 (Salam alshaxs⁸)、例えば、ムハンマド、アリーなどのような人物や場所に名づけられるものである。もう一つは、「種の固有名詞」 (Salam aljins) であり、この種類は名詞が持つ意味の属性を指す。例えば、オサーマー (osa:ma) という名前は、ライオンの属性を指示するということである。

固有名詞は、一般的に最も定性の程度が高いと解釈されてきたが、実際はそうではない。固有名詞は、ある人物や事物などに名付けられ、その人物や事物を唯一的に他と区別するのは事実であるものの、場面に応じて状況が異なることもある。例えば、話し手が聞き手に向かって、「ムハンマドが来た！」と発言したとする。聞き手の頭の中に何人ものムハンマドがあるとすれば、話し手の指している特定の対象の具体的な特徴がない限り、聞き手は同定することができない。この場合は、固有名詞であっても、不定になる。更に、固有名詞の語尾に、不定性を示すタンウィーンが付加されることもある⁸。例えば、

(4) a. man ja:ʔa?

Who came

誰が来たの？

b. Muḥamad-u-n.

Muḥamad-NOM-NUN⁹

ムハンマドという男だ。

従って、アラビア語の固有名詞の語尾にタンウィーンが付加され得るということは、固有名詞の定性の程度の低さを暗示している。何人もの人たちが同じ名前で名づけら

⁸ 他の文法的・形式的な現象もあるが、本稿ではここでとどめる。

⁹ Nunation はアラビア語で 'tanwiin' (タンウィーン) と言い、不定名詞の語尾のみに現れる活用形であり、定名詞には現れない。タンウィーンは不定性を表す方法の一つと見なされる。不定名詞に付加構造 (属格関係) が後続する場合には、タンウィーンが落ちるが、そうでない場合にはタンウィーンが義務的に現れる。それは、名詞が後ろの語から独立しており、後ろの語に付加していないことを意味する。

れるということは、固有名詞の相対的な共通性を指し示すということである。この場合、固有名詞は形式的には定になるが、意味的には不定になる。そこで、定性の認識には語の形式のみでは不十分であり、意味も必須条件であると指摘する必要がある。

1.1.1.1.5. 定冠詞「al-」

不定名詞に定冠詞「al-」が付加されると限定される。ある語が文に二回現れる場合には、二回目にその語に「al-」が付加される。

- (5) ja:ʔana: dʕaif-u-n faʔakramna: al-dʕaif-a
visited us guest-NOM-NUN so we welcomed DEF-guest-ACC
客さんが訪れてきたから、その客をもてなした。

また、「al-」は話し手と聞き手の間に共通的に認識されている人物や事柄に付加される。以下の例では、発話に出てくる裁判官は発話現場に初めて現れるが、話し手と聞き手の間で共通知識の人物として同定されるので、定の形で現れている。

- (6) ja:ʔa al-qa:di:
came DEF-judge
裁判官が来た。

更に、ある名詞が発話に初めて現れても、その同定領域が発話時である場合には、この名詞に「al-」が付く。

- (7) al-yawm-u taʕi:shu aħla: fatrat-i-n
DEF-today-NOM you live the best period-GEN-NUN
きょうが一番楽しい時間を過ごそう。

1.1.1.1.6. 付加構造（属格関係）

アラビア語の付加構造あるいは属格関係は、形式的に日本語や英語で観察されるものと異なる。日本語では、「…の…」という二つ以上の名詞を結びつける際に、「の」

がその二つの名詞の属格関係を表す働きをする。同様に、英語では、(...of...) あるいは (s) で属格関係が表されている。ところが、この二つ以上の名詞を結びつける働きをする単語に相当するものがアラビア語にはない。その代わりに、名詞を並べるだけで、属格関係が成り立つ。ただし、後続する語は限定されている語でなければならない。例えば、

- (8) ba:b-u l-ja:miṣat-i
door-NOM DEF-university-GEN
大学の門

この例でも分かるように、先行する語は後続する語により限定される。ところが、後続する語が非限定的な場合は、先行する語は絶対的な限定性ではなく、特別な限定性を帯びる。それは「特殊化」(taxs'i:sʕ) と呼ばれる。例えば、

- (9) ba:b-u ja:miṣat-i-n
door-NOM university-GEN-NUN
ある大学の門

例(9)では、後続する語が非限定的であるため、タンウーンが語尾に付いている。確かに (ba:b-u) のみよりも、(ba:bu ja:miṣatin) には、ある程度の限定性が感じられる。それは、この門はサイズや形から判断すると、家の門でもなく、店の門でもない、大学のような大きいところに当てはまる門であるという特殊化である。

1.1.1.1.7. 定性の度合い

以上 1.1.1.1.1 から 1.1.1.1.6 まで、アラビア語の定性標示を紹介した。アラビア語における定性標示は六つあるとはいえ、それぞれの定性の度合いが同じであるわけではない。むしろ、それらは段階的で、その段階の階層は言語学者によって異なる。

クファーの言語学者とイブン・アッサッラーギの説によると、最も定性の程度が高いのは指示代名詞であり、その次に人称代名詞、固有名詞、定冠詞「al-」、付加構造

という順番である。その理由は、指示代名詞だけは、視覚と知覚という二つの方法で認識され、それ以外のは知覚のみで認識されるからである。一方、他の言語学者の説では、人称代名詞が最も定性の程度が高いと言われる。

言語学者の多くは、固有名詞が最も定性の程度が低いと述べている。なぜなら、たった一つの名前が何人もの人々に付けられることがあるからである。更に、固有名詞には不定性の特徴であるタンウィーンが付く場合もあるため、形式的には定であるといっても、機能的には不定である時もある。

1.1.1.2. 不定性表示の分類

不定名詞は、二つ以上のものに名づけられるものであり、特定の一人や一つの物を限定することができない。不定名詞は共通的、一般的な意味を表し、外界にある事物を何らかの水準で種にまとめ、その種に属する全てのものを一つの呼称で呼ぶ。一つの名詞でその種に属する構成員全員を総称的に指すことができる。不定名詞の使用は、たいてい総称的、包括的な意味を表す機能がある。

言語学者は、不定名詞を形式から定冠詞「al-」を受け入れ得るものであると定義している。原則的に言えばそうであるが、「al-」が付加されなくても、定である場合がある。形式のみならず、意味も重要な役割を果たしていると言うべきである。例えば、

(10) kaːna ðaːlika ʕaːmˌaːn awwalˌaːn
it was that year-ACC-NUN first-ACC-NUN
それは最初の一年だった。

不定性は定性とは異なり、標示がないと言われている。しかし、前述したように、「タンウィーン」は不定性と結び付けられるので、不定性標示として見なしても良いだろう。不定性を表す方法は二つに分けられる。一つ目、「一般的な不定性」、二つ目、「指定的な不定性」である。以下で、それぞれを詳細に説明する。

1.1.1.2.1. 一般的な不定性

この範疇は更に、三つに下位分類される。

一つ目は、一般的な、曖昧な不定名詞である。例えば、地球、空、意思、動物、人間、男の人、女の人などのような総称的な名詞である。

これらの名詞は全て不定名詞であり、名詞が一般的であればあるほど、不定性の意味が強くなる。

二つ目は、人称代名詞が語尾に付加されても定にならない不定名詞である。このグループに属するのは、「miθla-ka (あなたのよう)」「shabaha-ka (あなたに似ている)」「yaira-ka (あなたと他のもの(人)、あなたと違ったもの(人))」「siwa:-ka (あなた以外に(の))」¹⁰という四つ名詞である。これらの名詞は特定の特徴を指さないため、形式的には定に見えるが、意味的には不定である。例えば、

- (11) marartu birajul-i-n shabah-a-ka
i passed by a man-GEN-NUN like you-ACC-PER.PRO
あなたに似ている男の人を通り過ぎた。

三つ目は、動詞の派生語である。

- (12) li: sʔadi:q-u-n ka:tim-u s-serr-i
i have friend-NOM-NUN keep-NOM(deriv) DEF-promise-ACC
秘密を守ってくれる友達がいる。

1.1.1.2.2. 指定的な不定性

この範疇に属する不定名詞は、その後ろに来る形容詞や不定名詞により修飾されたものである。

- (13) kita:b-u-n jadi:d-u-n
book-NOM-NUN new-NOM-NUN
新しい本

¹⁰(yaira-ka, siwa:-ka) はアラビア語の除外法である。

- (14) kita:b-u nahw-i-n
book-NOM grammar-GEN-NUN
文法の本

以上で、アラビア語の定・不定の体系を詳細に見てきた。次節で、先行研究で触れられている日本語の定性について論じる。

2. 日本語の定性について

前述したように、アラビア語や英語と違って日本語には統語的な定性標示がないため、定性についての研究はそれほど重視されてこなかった。本節では、日本語の定性を扱った先行研究に触れ、不足している点を述べる。

2.1. Wako Tawa (1993)

Wako は定性について三つの範疇を紹介した。Definite (定)、Indefinite (不定)、Nondefinite である。Nondefinite は、物に関する知識は具体化されずに、抽象的な概念として頭に蓄えられると言っている。例えば、'books are good for children' の場合は、books は特定の本を指すのではなく、人間が持っている本についての抽象的な概念を指す¹¹。このことを *schema theory* (スキーマ説) と呼んでいる。

Wako は、*null-NPs* (空名詞句) による日本語の定性に焦点を当てた。従来、「照応的名詞句」と「定名詞句」は区別されずに使用されてきたが、*null-NPs* (空名詞句) は常に「定名詞句」として解釈するのが一般的である。しかし、Wako は、この解釈を批判し、「照応的名詞句」が必ずしも定であるとは限らないと述べている。日本語の場合は、直接目的語のみならず、主語も *null-NPs* (空名詞句) で現れることがある。Kubo (1988) は、*null-NPs* (空名詞句) は本来定であると主張している。次の例を見よう。

¹¹Chesterman (1991) は、それを 'Generics' 「総称的」と呼んでいる。'Generics' という意味を表す方法は研究者の間で異なっている。

- (1) a. Did you write the letter?
 b. Yes, I wrote it_i yesterday.
 c.* Yes, I wrote []_i yesterday.
- (2) a. []_itegami_j-o kakimashitaka?
 [] letter-ACC wrote Q
 ‘Did [you]_i write the letter_j?’
 b. ee kinoo []_i[]_jkakimashita.
 Yes, yesterday [] [] wrote
 ‘Yes, [I]_i wrote [it]_j yesterday.’

例 (1) の英語の場合、指示対象が代名詞化されても、聞き手に認識され得ると話し手が判断した場合、**the letter** を代名詞 **it** で代用できる (1b)。しかし、(1c) のように **null-NPs** (空名詞句) には変えられない。一方、例 (2) の日本語の場合は逆に、主語も直接目的語も聞き手側から同定可能であれば省略され、**null-NPs** (空名詞句) で現れることが普通である、と述べている。

Kubo (1988) は、定性の概念について次のように述べている。”A definite NP refers to an entity that is in some sense given in the conversational common ground, whereas an indefinite NP refers to an entity that is newly added to the conversational domain.” (quoted in Tawa 1993 p. 380-381)

すなわち、「定名詞句」は、談話に何らかの形で登場した実体に言及する一方で、不定名詞句は、談話に新しく導入される実体に言及する。

Wako は、「定名詞句」と「照応的名詞句」とを区別している。「定名詞句」は、外延的な概念である一方、「照応的名詞句」は、機能的な概念であると言っている¹²。従って、ある名詞句が、定であり、照応的でもあるとしても、「照応的名詞句」が必ずしも定であることは意味しない。更に、代名詞は常に定であるわけではなく、指示対象の定性の状態と一致すると主張している。

¹² Wako では「定名詞句」と「照応的名詞句」の違いについてこれ以上は述べられていないが、「照応的名詞句」は、統語的な関係でその意味が決定される一方で、「定名詞句」の意味は統語的に決定されず、それを越えた過程で決定されると考えられる。

(3) Books_i are good for children, but they_i can be very expensive

この例では、books が nondefinite であるため、they も nondefinite であるとしている。同じく、先行詞が definite (定) または indefinite (不定) であった場合は、null-NPs (空名詞句) もそれぞれ definite または indefinite になる。

2.2. 庵功雄 (1994)

庵は、「定」を「定情報」と「論理的 - デフォルト的定 (LDD)」の二種類に分類している。日本語には統語カテゴリーとしての冠詞がないが、日本語の文脈指示に使われる「この/その」を f-定冠詞 (機能的定冠詞) と呼び、英語などに存在する統語的に必須である定冠詞を s-定冠詞 (統語的定冠詞) と呼んでいる。名詞句 NP1 (先行詞) に二度目以降に言及する際の NP2 (照応名詞句) のことを「定情報」、第一発話の定記述 (first-mention definite description) のことを「論理的 - デフォルト的定 (LDD)」と定義している。この二種類の区別は、定情報が結束性に関わるのに対して、LDD はそれに関わらないことにある。

更に、庵は LDD を「観念指示」と「非観念指示」に分けている。「観念指示」は、話し手と聞き手の間の共通知識を指すものであり、日本語では通常、「あの」で表される。また「非観念指示」を更に、「総称指示 (generic reference)」「唯一指示 (homophoric reference)」「デフォルト的指示 (defaultive reference)」「連想的指示 (associative reference)」の 4 種類に分けている。

庵は、定情報と LDD について行った考察の結果を次の表 1 にまとめる。(庵 (1994 : 47) から引用)

表 1

	英語	日本語
LDD	s-定冠詞	ゼロ
定情報	s-定冠詞/指示詞	ゼロ/f-定冠詞

庵は、冠詞を持つ言語（例えば英語）の LDD は s-定冠詞でマークされ、定情報は s-定冠詞または指示詞でマークされるとしている。一方、冠詞を持たない言語（例えば日本語）の LDD はゼロでマークされ、定情報はゼロまたは f-定冠詞でマークされると考えている¹³。

庵ははじめに LDD を「観念指示」と「非観念指示」に分けたが、結論では LDD の種類を区別せずに統一した結果を出している。これは、正確さを欠いている。なぜなら、この LDD の結果は、「非観念指示」のみにしか当てはまらないからである。また、「観念指示」は通常「あの」で表されるが、場面によってはゼロで現れることもある。庵は、定情報と LDD を異なったものとして分析したが、日本語の場合、どのような基準に基づいて区別したかは明確にしていない。

Wako は、「定名詞句」と「照応的名詞句」とを区別しているが、それぞれが外延的な概念と機能的な概念であるもの以上は述べていない。しかし、どのような基準で、どのような過程でそれらの概念が決定されるのかは Wako の研究では明確にされていない。

¹³ このゼロはゼロ代名詞のことを指している。以下の分析では、「裸名詞」と呼ぶことにする。

第二章

指示対象の捉え方から見るソとアの使い分け

1. 概要

日本語の指示詞コ・ソ・アについては、従来より多くの研究がなされてきた。談話における聞き手の存在の重要性に関心を向けた研究者もいれば、聞き手の立場を全く考慮せず、指示詞選択の判断を全て話し手に帰す研究者もいる。本論文は「定性」を中心に考察しているため、聞き手の存在は無視できない。むしろ、聞き手への配慮が談話の進行や発展に重要な要因であると主張したい。指示詞を通して日本語の定性標示・限定標示を表すことができるか否かが目的である。それを達成するために、まず、指示詞の特徴や使用条件を表すことが必要である。本章では、ソとアに焦点を当てながら、談話において、話し手のみならず、聞き手の存在も指示詞の選択に重要な役割を果たしていることを主張する。また、ソとアの使い分けに関わる要因は、田窪・金水（1996）が提案した話し手の直接的経験・間接的経験という説が常に当てはまるわけではなく、談話における聞き手の存在及び、話し手と聞き手が指示対象をどのように捉えているかということが関わっていると考える。

2. 先行研究による指示詞の機能

日本語の指示詞コ・ソ・アは、古くから多くの研究者の注目を引き、様々な観点から広く研究されてきた。指示詞の研究史という点、佐久間鼎の研究から語り始めるのがほぼ常識である。佐久間（1983）は指示詞を人称代名詞と関連させ、コ・ソ・アをそれぞれ一人称、二人称、三人称に関係付けている。また、久野（1973）は文脈指示のア系列、ソ系列について次の結論を出している。

ア系列指示：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる。

ソ系列指示：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知っていないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。

一方、金水・田窪も指示詞の研究に大きく貢献しており、話し手と聞き手の対立の有無に基づく融合型探索と対立型探索の運用を提案した。次節で田窪・金水（1996）が提案した心的領域に基づく仮説を提示する。

2.1. 田窪・金水（1996）の心的領域に関する仮説の検証

金水・田窪は指示詞研究に大きく貢献しており、話し手と聞き手の対立の有無により、融合型探索と対立型探索の運用を提案した。本章では、田窪・金水（1996）が提案した複数の心的領域モデル、いわゆる「直接経験的領域」と「間接経験的領域」を検証し、新たな提案を導き出すことを試みる。田窪・金水の提案によれば、ア系列は談話中で導入される「直接経験的領域」に属する話し手の過去のエピソード情報や実際に自分と何らかの直接的な関係がある経験を指す時に用いられる。一方、間接的に獲得された、つまり話し手が自分で実際に経験したのではなく、他の手段を経由して情報が入る、いわゆる「間接経験的領域」が談話中で導入される際には、それに属する情報はソ系列で指示される。しかし、実際には、この提案に一致しない場合もある。そこで、常に「直接経験的・間接経験的」の違いによって、アとソの使い分けの作業が行われるのではなく、それらの選択に他の要因も働いていると考え、アとソのいくつかの例文を分析しながら、再考察を行う。

2.1.1. 対話者の談話への効率的な貢献

適切な対話が正確に成立するためには、話し手と聞き手、つまり最低条件として二人以上の参加者の存在が必要となる。参加者が一人のみであれば対話ではなく、独り言ということになる。対話により、対話者の間に情報の交換という作業が行われ、この情報の交換を通して話し手が相手の知らない新しい情報を教えたり、相手に自分が知らないことを聞いたり、二人で以前一緒に経験したことのある出来事を思い出したりして、情報を共有する。どの対話においても情報の交換が円滑に進行するには、話

し手が相手の知識のレベルや話題との親疎度を念頭に入れておく必要がある。すなわち、相手の知識内に存在しないと想定したことを、適切な言語形式を使用しながら、新情報として導入することになる。また、相手の知識内に存在すると想定したことについて述べる場合は、それに合った言語形式を使用し、その内容を復習したり、回想したりするという形になり、情報確認の作業を行うということになる。対話の参加者が互いに相手の立場を考慮し、話題との関係、つまり知識の有無から生まれる指示詞の使い分けの規則を守り、情報の交換を適切に行うことに成功すれば、確実な談話が成立したということができる。このような対話・談話における情報の交換は「談話管理」と呼ばれ、談話管理に参加するものとしての聞き手・話し手は「談話管理者」と呼ばれる（金水・田窪 2004）。一方、話し手が話題に関する相手の情報量を想定せず、対話を話し手のみの観点から進行させようとしたら、相手の存在を無視していることになり、対話が独り言のような語りの形になる。このようなことになったら、談話管理に必然的な条件である、対話への話し手と聞き手の相互の貢献による効率的な情報の交換が失われ、最終的に、談話が中断されるという結果になる。

2.1.2. 聞き手の存在と談話領域

前節でも述べたように、談話は常に、話し手及び聞き手という二人以上の参加者から成り立つ。また、話し手が対話に情報や提案などを導入する際は、相手の知識領域を考慮することが談話管理の成立条件となっている。しかしその一方で、田窪・金水（1996）は、話し手が想定する聞き手の領域を考慮せず、言語形式（本章では、指示詞を扱う）の使い分けの判断を全て原則として話し手のみに帰している。そして、二つの心的談話領域を提案し、話し手が聞き手とは無関係に、この談話領域に即して指示詞の選択を行うとしている。田窪・金水が提案した心的談話領域を以下に引用する。

Dー領域（長期記憶とリンクされる）

長期記憶内の、すでに検証され、同化された直接経験情報、過去のエピソード情報と対話の現場の情報とリンクされた要素が格納される。直示的指示が可能。

Iー領域（一時的作業領域とリンクされる）

まだ検証されていない情報（推論、伝聞などで間接的に得られた情報、仮定などで仮想的に設定される情報）とリンクされる。記述などにより間接的に指示される。

この二つの心的領域を前提とすると、ア系列の指示詞はD（irect）ー領域、ソ系列の指示詞はI（ndirect）ー領域に属する対象を検索するということになる。しかし、この規定は全ての場合に当てはまるのであろうか。このことを次節で詳細に考察する。

3. 直接的情報・間接的情報による指示詞の選択

談話においては、話し手と聞き手の相互行為によってはじめて情報の交換が成り立つ。話し手が聞き手の知識領域を考慮せずに対話を続けようとした場合、その相互作用がなくなり、対話における聞き手の役割の重要性は小さくなってしまう。田窪・金水（1996）が設定したこの二つの心的領域は、指示詞選択の判断を、聞き手の知識は問わずに、全て、話し手がその出来事を直接経験したか否かということに帰している。すなわち、談話において、話し手が自分で実際に経験したことがあることについて言及したい時は、話題になる出来事についての聞き手の知識の有無を問わず、Dー領域に属している経験として、アで指示するのが普通であると指摘している。逆に、直接的な経験を通して得られたことではなく、間接的な方法により得られた情報、つまり現在の対話で初めて導入されたこと、誰かから受け取った情報、ニュースや新聞などから得られた情報などのような他の仲介手段を経由して入った情報は、全てIー領域に所属しており、ソで指示しなければならないというのが田窪・金水の提案である。

つまり、この提案によれば、ア系列指示詞の使用は、従来議論されてきたこととは異なり、話し手と聞き手の共有知識とは関係なく、話し手個人の直接的経験としか関係を持たないということになる。また、ソ系列指示詞の選択も、聞き手の立場を考慮することなく、話し手の発言する情報が間接的に獲得されたものであり、主観的に扱うことができないからということになる。このことは次の二つの例で示される。

(1) 昨日神田で火事があったよ。{あの/*その} 火事のことだから、人が何人も死んだと思うよ¹。

(田窪・金水 1996)

(2) A: 先週神田で火事がありました。その火事で学生が二人死にました。

B: その火事のことは新聞で読みました。

(東郷 1994)

田窪・金水が設定した心的領域の提案によると、この二つの例文の説明は次のようになる。例文(1)では、話し手が自分が実際に見聞きした火事について話しており、聞き手にとっては新規の情報であっても、それとは関係なく、話し手にとっては直接的な経験による情報であるため、A系列で指示する方が容認度が高いのである。話し手は、直接経験した火事の属性について話しており、その属性に基づいて死者の想定を導き出す際、D-領域にアクセスしている。また、例文(2)のBのソ系列の選択は、談話で提供されている情報が直接的な経験ではなく、間接的な経験によって得られたものであるからである。つまり、話し手のD-領域に格納されている情報には、談話に登場した情報と一致するものがない。そこで、話し手は、談話中で初めて提示された情報を一時的に確保する領域としてのI-領域にアクセスしているので、ソ系列で指し示すのが最も適切であると考えられる。このような説明では、聞き手の立場は全く考慮されず、話し手の立場のみが重視されるということになる。

東郷(2000)も田窪・金水の心的領域に触れた。上記の例は、久野(1973)のA系列指示詞の使用の制約に明らかに違反していると述べ、彼らの分析の不備を指摘した。この不備を補うために、共有知識の制約に反してAを用いるには田窪・金水が提案した直接的知識の経験に加え、「聞き手の談話モデルの状態の査定をいったん停止、または意図的にカッコに入れている」という追加の提案を導き出した。話し手がこの追加の操作を行うことで(1)のような一方的断定というニュアンスや(3)のような聞

¹ 田窪・金水(1996)で、「あの」に「?」がついていたが、本章では削除した。

き手を置いてきぼりにして回想にふけっているというニュアンスが生じると述べている。

(3) A: Bさんが芸能界に入ったのはどんな時代でしたか？

B: あの頃は浅草オペラの全盛時代でしたね。

本章では、聞き手の立場を改めて考慮し、指示詞の選択には話し手自身の直接経験のみならず、指示対象に対する聞き手の知識のレベルも考慮する必要があると主張する。それが正しければ、ア系指示詞は、直接獲得された情報のみを指示するとは限らず、間接的に得られた情報であっても、聞き手との共有知識であり、その指示対象に対する認識の度合い・親しさのレベルが高いという条件が満たされていれば、ア系列指示詞の使用が可能になる。一方、話し手にとっては直接的な経験であっても、聞き手の立場との関係によっては、ソ系列を使うこともあれば、ア系列を使うこともある。

3.1. 例文の再考察と仮説

本節では、上述の例文の再考察を行った後、本章の主張に基づく仮説を立てる。

(4) 昨日神田で火事があったよ。{あの／*その} 火事のことだから、人が何人も死んだと思うよ。

(再掲)

この例文では、話し手自身が実際に経験したことがある災害について語っており、この災害が話し手と強い関わりがあることは確かである。それは「～のことだから」という表現から分かるように、話し手が持つ火事による被害についての知識が反映されているからである。話し手は、この火事の現場にいて、被災状況を実際に見聞きしたため、その状況に強く衝撃を受けている。この気持ちを含めて災害の情報を聞き手に伝えることにより、聞き手の同情や気持ちの分かち合いが得られると考えている。久野(1973)によると、ア系指示詞の使用には、話し手と聞き手との間に共通の経験があることが必要条件になっている。話し手が聞き手と共通の経験をア系列で指示す

ることにより、二人が同じことに関して、同様の気持ちを持っており、そのことに関する気持ちや思い出などを共有しているという意味になる。同様に、この例では、話し手に関わりの深い経験で、聞き手は知らなくても、ア系指示詞で指示することにより、聞き手も同じような気持ちを持ち、災害に関する感情を共有することになる。つまり、この例文でのアの役割は、談話に直接的経験を導入するというよりも、自分の経験をア系列で談話に導入することにより、そのことに聞き手も関わらせ、仮想の共有の世界を作ることにあるということになる。

(5) A: 先週神田で火事がありました。その火事で学生が二人死にました。

B: その火事のことには新聞で読みました。

(再掲)

田窪・金水の説明によれば、A が談話で導入している情報は、自分の直接的な経験によるものではなく、間接的な手段、つまり伝聞・報道などによって得られた情報であるため、I－領域に関わっているということになる。また、その情報は、B にとっても談話中でのみ提示された情報であるため、I－領域に帰属していると考えられる。しかし、本章では別の解釈を提案する。

A が談話で導入した情報は直接経験したことのある出来事だと想定することもできる。なぜなら、この文には、「～ようだ」「～そうだ」「～らしい」など、伝聞・報道等のいわゆる間接的な獲得方法を表す助動詞が使用されていないからである。しかし、A は、自分が導入している情報が、発話時点で聞き手に共通のものであるかどうか分からないため、聞き手の立場を考慮して、ソで提示している。

また、B のソの解釈にも二つの可能性があると考えられる。一つ目は、この火事について新聞の報道より細かい情報が得られたが、B には何らかの理由でその詳細まで入り込もうとする気がないか、もしくは、災害について深く考えず、自分の立場から遠ざけたい場合である。つまり、災害に自分の気持ちに関与させたくないことを示すために、ソを用いた。この場合は、あたかも情報が相手の領域に帰属しているかのように話している。二つ目は、B がこの火事について新聞から得た「神田で火事があった」というわずかな情報しか持っておらず、事故の詳細までは知らないという場合で

ある。つまり、B が「その火事のこと」のソで指しているのは、A の発言前半の「先週神田で火事がありました」という部分であり、後半の情報は含まれていないということになる。

このように、二つの解釈があり得るということから、次の結果を導き出すことができる。ソの使用には、話し手または聞き手の指示対象に関する知識や情報が少ないということを指摘する機能がある一方、指示対象に対して、かなりの情報を持っているが、自分とは関係ない、あるいは自分は関わりたくない話題であり、相手の領域にとどめておきたいということを指摘する機能もあるのである。

以上の二つの例文から次の仮説を立ててみる。

仮説：

1. 指示対象への認識や関わりの度合いが話し手も聞き手も高い場合、あるいは話し手が聞き手に話し手と共通の認識や関わりを持つことを要求する場合、ア系列指示詞を使用することができる。
2. 話し手が指示対象に対して持っている認識や関わりの度合いが聞き手よりも低いあるいは遠ざけたい場合、ソ系列指示詞を使用することができる。

この仮説を立証するために、以下で更に例文を分析してみる。

3.2. 考察

3.2.1. ア系列指示・ソ系列指示の使い分けに関わる状況

本章の仮説を立証するために、作例を作り、名古屋大学の大学生日本語母語話者男女 37 人、北海道大学の大学生日本語母語話者男女 62 人に配布し、「ソ系」または「ア系」のどちらかを選択してもらった。その結果を以下で考察したい。

- (6) (二人は海外にいるが、3月11日の日本の地震について話している。二人とも地震についての情報のレベルは同じだとする)

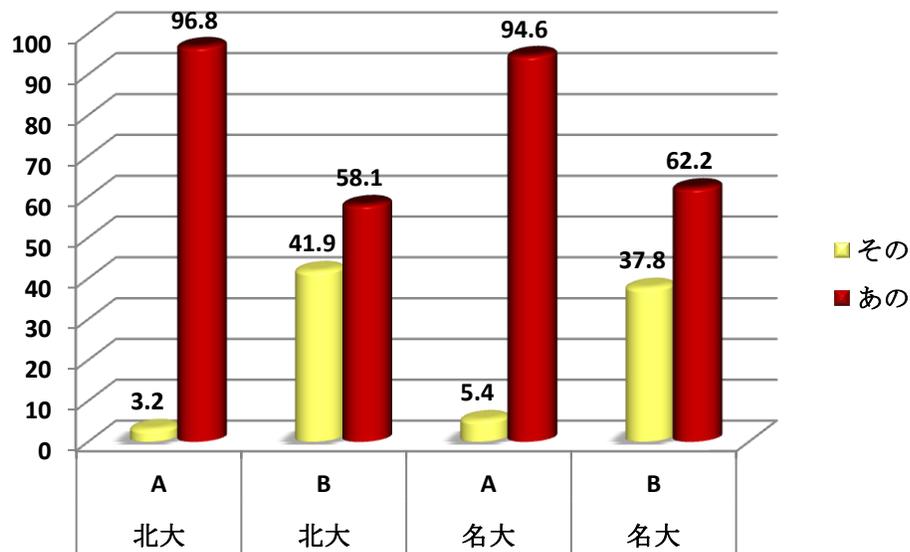
A: (その/あの) 地震は本当に恐ろしい災禍だった。友人が二人津波で流された。

B: それは気の毒ね!! 私の親戚の自宅も(その/あの)津波で流された。今、避難所にいる。

(作例)

この例文では、AもBも実際に経験していない地震について話している。つまり、地震が起きた当時、二人は日本におらず、海外に滞在していたという想定 of 例文である。母語話者の回答を見ると、「あの」がAでもBでも圧倒的に多いという結果が得られた。北海道大学の学生のAの「あの」の選択は96.8%を占め、Bの「あの」の選択も58.1%を占めた。同様に、名古屋大学の学生のAの「あの」の選択は94.6%を示し、Bの「あの」の選択も62.2%を示した。以下の図1に結果を示す。

図 1



この結果から考えられるのは、金水・田窪が設定した心的領域による「直接的経験」「間接的経験」の理論は、常に指示詞の選択を説明できるとは言い切れないというこ

とである。この例文が説明している状況は、地震が起きた際、対話者は海外に滞在していたため、その地震を実際に経験していないということである。したがって、母語話者の「あの」の選択は、直接的経験に基づいているのではなく、他の要因が関わっているに違いない。それは、本章の仮説である「認識や関わりのレベル」の役割である。

二人は地震の際、現地におらず、実際に地震を経験しなかったが、共通の母国である日本との絆を強く感じていて、その震災にあまりにもショックを受けたため、あたかも自分がその災害に逢ったかのように感じている。また、自分たちに身近な友人や親戚が亡くなったり、被害を受けたりしたため、身近な人々に同情したり、彼／彼女らのこれからを憂慮したりして、震災を強く意識している。そのため、A、B どちらも「あの」を選択したのではないかと考える。

次に他の例文について検討してみよう。

(7) (二人が東京スカイツリーについて話している。実際にまだ見ていなくて、テレビでしか見ていないとする)

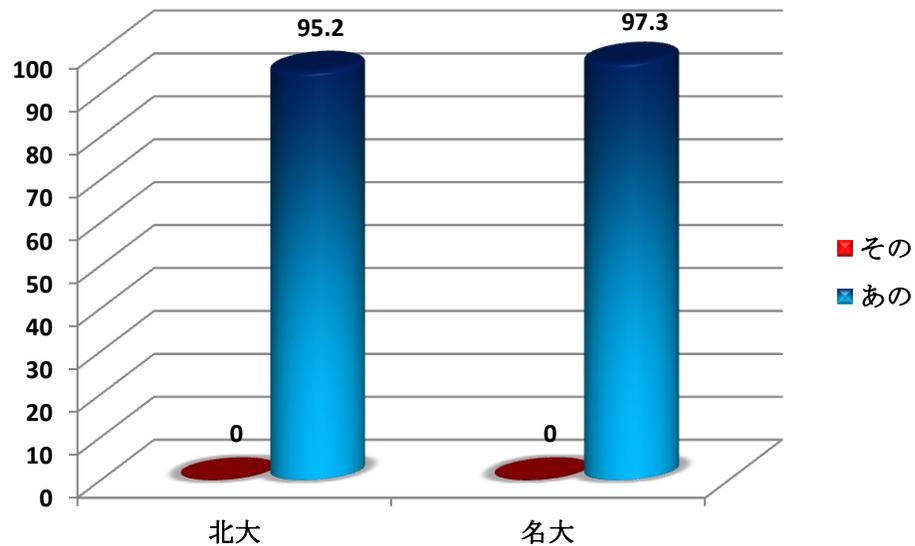
A: ねえねえ、今朝、東京スカイツリーがテレビで映ってたよ！

B: うん、見た見た。(それ／あれ) ってすごいよね！高さ何メートルあるって？上ってみたい。

(作例)

この例文も、A、B 共に東京スカイツリーを目の前で見たことがないという設定に基づいている。しかしそれにもかかわらず、回答者は全員が（北海道大学 3 人、名古屋大学 1 人は未回答）B の答えとして「あれ」を選択した。図 2 にその結果を示す。

図 2



対話者は二人とも、スカイツリーを実際にまだ訪れておらず、スカイツリーについて得られた情報は、間接的な方法、つまりテレビ、新聞など報道によるもののみであるにもかかわらず、母語話者の回答から見ると、間接的な方法だからといって、ソ系列を使用すべきだということにはなっていない。スカイツリーは最近完成した日本の代表的な最も高い塔であり、最近話題になっているので、誰もが知っているはずの観光名所である。したがって、二人とも実際に見てはいなくても、それについての情報はよくテレビで見たり、雑誌で読んだりしていて、他の塔と容易に区別することができる。したがって、直接的に経験していなくても二人ともよく認識していると言えるため、「あれ」を使うことができる。

続いて、以下では、先行研究に掲載された例文を考察する。これらは全て、金水・田窪（2004）『指示詞』に挙げられているものである。

- (8) 僕は大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが、君も**あの**先生につくといいよ。

(9) A: 先生が学生だった時には、どのように勉強されたのですか。

B: あの頃は本がなくて、本当に苦労しました。

例文 (8) では、話し手が聞き手（会話には現れていないが、場面としては必ず存在する）に向かって、自分がかつて教えてもらった先生との経験について話している。この人物が聞き手に知られていない人物であることは、(8) の前半で対象の先生が初めて登場しており、更に、「～という」という聞き手に対して未知の情報を提示する際に用いられるメタ言語形式が使われていることから分かる²。それにもかかわらず、「あの」が使われているのは、話し手が情報をただ客観的に伝えているのではなく、あまりにもすばらしい経験だったという気持ちを聞き手と分かち合いたいと思っているためだと考えられる。すなわち、「あの」を使うことによって、話し手は、聞き手にもこの先生の教育のすばらしさを知ってもらい、この先生の下で勉強したいという気持ちを持ってもらいたいと思っているのである。

(9) でも同様に、B は、自分が勉強した頃は、いかに大変で、本探しにもいかに苦労したかということを手元に生々しく伝えようとしていて、その気持ちを A にも共有してもらうために、ア系列指示という共通の経験を要求する表現を使用している。

次に、(8) を (10) 、(11) と比較してみよう。

(10) 僕は大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが、君も (?*あの/その) 先生につきなさい。

(11) 僕は大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが、君も (?*あの/その) 先生につく気はありませんか。

例文 (10) 、(11) は、(8) とは情報の提供の仕方が異なっている。(10) では、話し手が聞き手に向かって何かを言っているのは確かだが、今度は命令の形になって

² 田窪・金水 (1996) では、固有名詞を使用する際には共有性の前提があり、この前提が崩れた場合、日本語では「山田君」のような裸の形の固有名詞は使うことができず、「山田君って」のように引用の形式を含む形にしなければならないと述べられている。

おり、その命令を遂行するのは聞き手である。従って、このような場面においては、聞き手の立場がより重要になってくる。話し手は以前山田先生に教わったことがあるが、その経験について聞き手に情報を与えようとしているわけではなく、聞き手が山田先生を知らないことは承知で命令しているため、自分よりも聞き手の立場の方が重要だということになる。また、(11)では、後半は質問の形になっている。質問は、話し手が聞き手に、聞き手が持っている（と話し手が想定する）情報、あるいは聞き手についての情報を求める際に用いられる情報要求の方法である。よって、質問においては、質問する側よりも質問される側の立場の方が重要だということになる。それで、この例文でも、話し手より聞き手の立場を重視する言語表現であるソが使われている。

(12) A: 中央研究所の吉田をご存知でしょう。

B: ああ、（その／??あの）方は確か、あなたと同期で入社されたとかいう、慶応出身の方でしたよね。

A が導入した吉田が、頭に蓄積されている特定の性質を持つ吉田の属性に一致しているかどうか、発言の時点で B はまだ分かっていないため、ここでは「その」のほうが適切である。

(13) A: 昨日山田さんという人に会いました。（その／*あの）人、道に迷っていたので助けてあげました。

B: （その／*あの）人、ひげをはやした中年のひとでしょ。

A: はい、そうです。

B: （その／あの）人なら、私も知っています。私も（その／あの）人を助けてあげたことがあります。

(12)と同様に、(13) B の最初の発言の時点では、対象の人物の属性が、頭の中にある候補者と一致しているかどうか、まだ確認できていない。そのため、「その」の方が適切であった。しかし、会話の流れとともに確認ができたため、二つ目の発言で

は「その」も「あの」も可能になる。その使い分けは、話し手が対象との関わりをどう捉えているかによって決まってくる。つまり、話し手が指示対象となる人物との経験の詳細を思い出しながら語っている場合は、「あの」を使うが、経験の詳細まではあまり考えないで、概ねに語る場合は「その」を使うということになる。

4. 結び

本章では、日本語の指示詞、とりわけ「ソ」と「ア」の使い分けに関わる条件や状況を考察した。田窪・金水（1996）の提案を検討した結果、適切な談話が成立する条件として、聞き手の立場を考慮することは必然的な要素であることが明らかになった。また、田窪・金水（1996）が提案した「直接的経験・間接的経験」による指示詞の選択という仮説には、当てはまらない場合があるということも明らかになった。そのため、新たな仮説を立て、いくつかの例文を分析しながら、指示詞の選択に他の要因が関わっていることを立証した。すなわち、指示詞を用いる際、話し手は相手の立場を考慮しながら、指示対象が自分とどのように関わっているか、自分がどのように認識しているかを判断した上で、指示詞を選択している。「ア」系列指示詞は、話し手と話題になっている対象のかかわりや結びつきが強いことを示す。また、相手を自分の世界に引き寄せて共感してもらいたい場合にも適用される。それに対し、情報量とは関係なく、指示対象と自分の関わりが弱いと感じ、認識の度合いが低いことを示すのが、「ソ」系列指示詞の役割であることが明らかになった。

本章では、「ソ」と「ア」の使い分けに関わる状況やそれぞれの聞き手との関係を考察してきた。第三章では、名詞句の特徴を考察した後、第四章以降では指示詞、とりわけ「ソ」と「ア」と「定性」との結びつきを追究する。

第三章

名詞句の「同定可能性」をめぐって

—その適用と定性との関係—

1. 概要

定性には、定名詞句 (definite) ・不定名詞句 (indefinite) の二種類があり、この二つの名詞句の特徴に関して、多くの議論がなされてきた。「定」は聞き手側から同定可能な名詞句であり、「不定」は聞き手側から同定不可能な名詞句であるというような趣旨の説明が一般的である。しかし、実際にはこの関係はいつも当てはまるわけではない。そもそも、「同定可能」とは何かを明確に定義しなければならない。本章では、定名詞句・不定名詞句と「同定可能性」との関係の説明するために、話し手と聞き手の間で行われている会話において、指示対象の指定はどのような過程を経て同定され得るといえるかを明示する。更に、発話の現場で、聞き手が指示対象を指定し、同定できたと言った際に、どのような情報量が指示対象の同定を可能にしたかということ明らかにする。同定を可能にする情報量は、実世界の中からのみ、すなわち指示対象に対する既知・未知の情報のみに基づいて決定されるのか。それとも、会話中でもたらされる言語的情報、つまり瞬間的な知識あるいは、一時的な知識、換言すれば、文のレベルでも決定され得るのかということ考察し、明らかにする。また、定冠詞や定性標示が付加されている名詞句を全て「定名詞句」とすることは正確ではないと主張する。名詞句をその機能によって「限定名詞句」と「定名詞句」の二種類に分類して、それぞれの特徴を詳細に考察する。

2. 談話世界における指示対象の認識

2.1. 指示対象の存在する領域

東郷（1999）は、指示対象が談話の進行とともに談話モデル（discourse model）¹の中で登録され、指示対象が存在する談話領域は三つに分けられていると指摘している。それらの領域は：

- i 共有知識（shared knowledge）
- ii 発話状況（context of use）
- iii 言語文脈（linguistic context）

i 「共有知識」とは、発話開始以前に話し手と聞き手がともに所有している世界についての一般的知識、及び話し手と聞き手がともに経験した出来事とそれに関わる知識の全体をさす。

(1) The whale is a mammal.

くじらは哺乳動物だ。

al-hu:t-u hayawa:n-u-n θadyiy-u-n
DEF-whale-NOM animal-NOM-NUN mammal-NOM-NUN

ii 「発話状況」とは、話し手と聞き手を含む発話の現場と、その場に存在する実体の全てを含む。

(2) Shut the door.

ドアを閉めて。

iyliq al-ba:b-a
Shut DEF-door-ACC

iii 「言語文脈」とは、談話中でもたらされる情報である。

¹東郷（1999）では、談話モデルとは、話し手と聞き手の両方の側に、談話の進行に応じて構築される心的領域をさすと説明されている。

(3) A man got off the train. **The man** had a black suitcase.

男の人が電車を降りてきた。その男は黒いスーツケースを持っていた。

nazala rajul-u-n min al-qit'a:r-i. ka:na al- ragul-u

Got off a man-NOM-NUN from DEF-train-GEN. was DEF-man-NOM

yahmilu haqi:batan sauda:ʔan

carrying suitcase black

これら三つの領域全てが「同定」の概念と深く関わっているが、中でも、三つ目の言語文脈という領域が本章の考察対象となる。

2.2. Familiarity (親密性) と指示対象の同定

Christopher (1999) では、familiarity (親密性) は聞き手に指示対象を同定させる引き金として働き、聞き手が定名詞句の指示対象を実世界に存在する実体 (real-world entity) と対応させるように求められると指摘されている。このとき、指示対象の存在が分かるのは、眼前で見ることができる、以前聞いたことがある、または、その存在が他のものの存在から推測できるからである。

Chesterman (1991) は、同定の原則として、聞き手が話し手の発言から指示対象を同定できるように、十分な手段を与えられなければならないと述べている。ここで、「同定」が手がかりになっている。例えば、'I have no idea who the author is' のような例では、author の前に the が置かれている。とはいえ、ここでの定冠詞の使用は、この author の名前を求めるために使用されているのではない。話し手が指している author は、何冊もの本の中で、どの本の執筆者か、ということを知り手が同定していることを意味する。それとともに、定冠詞+単数形の使用は、話し手と聞き手が発話時点で共有している知識 (話題の指示対象) が一人だけの著者に当てはまることを意味する。これはいわゆる uniqueness (唯一性) の概念である。Hawkins (1978) は、uniqueness とは対照的に inclusiveness (包含性) に言及している。包含性とは、複数形名詞句に伴う定冠詞が、問題になっている指示対象の全体を指すことである。このことから「同定」の条件として、親密性と唯一性または包含性が必須な要因であると考えるのも良いであろう。

3. 定名詞句・不定名詞句と同定との関係

3.1. 指示対象を同定する領域

丹羽 (2004) は、「定名詞句」(同定可能な名詞句)とは、指示範囲が定まった名詞句であり、聞き手が指示対象を他の対象と区別することができるものであるとしている。一方、「不定名詞句」(同定不可能な名詞句)とは、指示範囲が定まっていない名詞句であり、聞き手が指示対象を他の対象と区別できないものであると述べている。「定名詞句」は、「既知名詞句」と呼ばれることが多い。

同定可能な対象は、必ずしも常に聞き手にとって「既知」の対象とは限らない。Dik (1981) は、”By means of a definite term the speaker expresses the fact that he acts on the presupposition that the Addressee can identify the particular intended referent(s) of the term in question” (Dik 1981:61) と述べている。つまり、発話時点以前から指示対象を知っているということは必ずしも条件ではない。例えば、聞き手が談話中で初めて聞いた指示対象を話し手から与えられた必要な情報、いわゆる言語文脈の状況下で、他と区別し、一つまたは一人の対象に限定できた場合、この対象を実際に知っていたため指定できたとは限らない。既知の対象ではなく、他の認識の過程を経て、限定できる段階まで至ったとも考えられる。このことを立証するために、以下の二つの例文を見比べたい。

(4) A: 先週一緒に行った寿司屋さん、もう閉店だそうだよ。

laqad ?uyliqa matʕam-u l-sushi allaði: ðahabna:
it has been closed restaurant-NOM DEF-sushi REL.PRO we went
ilaihi maʕan alisbu:ʕa lma:dʕi:²
to it together last week

B: へえ。あの寿司屋はおいしかったのに…

lima:ða:ʔ laqad kana tʕaʕa:m-u-hu laði:ðan
why? it was its food-NOM-PER.PRO. delicious

²l は定冠詞 al- の異形態である。文中の定冠詞 al- は、母音が脱落し、異形態 l で現れることが多い。

この例文の B の答えを見ると、確かに指示対象は話し手と聞き手の間に発話時点以前より実際に経験されていた既知の情報として脳内で蓄積されている対象であると考えられる。このことは、日本語の「あの」とアラビア語の人称代名詞に明確に反映されている。日本語の指示詞「ア」の使用条件は、久野（1973）が「その代名詞の実世界における対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる」と述べ、東郷（2000）は「ア系指示詞は、共有知識領域に存在する対象をさす。また共有知識領域に存在する対象をさすことができるのは、ア系に限られる」と述べている。また、アラビア語の場合も、人称代名詞は定性を表す方法の一つであるとされている。人称代名詞自体に意味はないが、文脈の中で、特定の人物や事物を指してはじめてその意味が生じる。話し手が聞き手に向かって、特定の人物や事物について話しかけ、聞き手がその指示対象を同定できると話し手が判断した時点で、その名詞を代名詞化することができる³。この例の流れから明らかなように、代名詞化されている対象の寿司屋は、話し手と聞き手の両方の経験の中に存在し、登録済みのものである。従って、B にとっては既知の情報として同定可能な対象であると考えられる。このことを次の例と見比べてたい。

- (5) きのうち公園へ行ったとき、ボールで遊んでいる男の子を見た。その子は外国人に見えた。

Sindama: ḍahabtu ila: l-ḥadi:qat-i ʔams raʔitu
 when i went to DEF-garden-GEN yesterday i saw
 tʕifl-a-n yalʕabu bilkurati. **at-tʕifl-u** ka:na shakluhu
 a boy-ACC-NUN playing with the ball DEF-boy-NOM looked like
 ajnabiyyan.
 a foreigner

この例では、話し手自身が経験したことを聞き手に語っており、聞き手は指示対象を知らず、外界の中から指示対象を指定できないという状況にある。「男の子」はこの発話で初めて登場し、第一の文に日本語で裸名詞句、アラビア語で非限定名詞句

³ 「代名詞化」は、同じ単語を反復することを避ける機能があり、代名詞の指示対象はその先行詞となる。（Alnahw Alwafi (1974), Ham'i Alhawami' fi Sharhi Jam'i Aljawami' (1998)）

(NUN が付加されている) の形で現れている。しかし、第二の文では日本語で指示形容詞「その」に後続し、アラビア語では限定辞 al- を伴った名詞句の形で現れている⁴。東郷 (1999) は、談話モデルの中に登録された指示対象は、後続する談話で、定名詞句や代名詞を用いて照応することができる」と指摘している。アラビア語でも同様の現象が見られる。発話時以前には話し手にしか知られておらず、共有知識でないため、「あの」ではなく、照応の役割を果たす中立的な「その」が用いられている。発話以前に話し手と聞き手との間の経験に基づいて獲得され、共通に知られている情報は「共通知識」と呼ぶのが一般的だが、そうでない知識はこのタイプの知識と区別したほうが良い。そこで、発話以前に話し手と聞き手との間に共通のものでなく、話し手にしか知られておらず、発話の進行における相互行為により聞き手側から引き出される知識については、「**発話現場の推測知識／発話現場から引き出された知識**」という新しい呼称を用いることにする。これはまさに、言語文脈領域による同定である。聞き手にとって、指示対象の同定は「言語文脈外」に存在するのではなく、前の文に導入された「男の子」、すなわち「言語文脈内」に存在するということである。

この二つの例文を見比べることにより、例 (4) は「定名詞句」、例 (5) は「限定名詞句」と考えても良いであろう。「定名詞句」と「限定名詞句」の違いについては、次の節で詳細に考察する。

3.2. 「限定性」は「定性」ではない

東郷 (2001) によれば、フランス語の定名詞句は機能の面で「指示説」と「存在前提説」に分けられる。「指示説」では、定名詞句 le N は N の内包を通して外延に存在する対象 a を指示するのに対し、「存在前提説」では、定名詞句 le N は N の記述に一致する対象がどこかに存在するという前提を持つだけで、a を指示したりはしないと述べている。「指示説」では、既知性が必要な条件とされるが、「存在前提説」では、必要とされない⁵。

⁴ 定冠詞 al- は、後続子音が歯茎音の場合、l が同化する。

⁵ フランス語は、指示説であれ、存在前提説であれ、定名詞句は一つの形 'le N' を持つという点でアラビア語と同様である。この形は状況により様々な機能を担うことができる。しかし日本語では、「限定名詞句」と「定名詞句」がそれぞれ異なった形で表されるため、異なる概念と考えるべきであるというのが本章の主張である。

これと同様に、本節では「限定名詞句」と「定名詞句」は異なった概念として扱い、それぞれ次のように説明する。

- 「**限定名詞句**」とは、新規の情報として導入された非限定名詞句であっても、後半で限定的な形を伴うと、前半の非限定名詞句と同定される名詞句のことである。このタイプの名詞句は、文中でしか同定されず、実世界に存在する対象と結びつけることは必要とされない。（東郷の存在前提説に類似する）

- 「**定名詞句**」とは、話題になっている対象が、発話時点前から対話者の間で共通の知識として同定され、実世界の中から特定の人物や事物を指示対象として特定することができる名詞句のことである。「定名詞句」の指示対象の同定は、言語文脈から独立し、言語文脈外の情報に依存する。（東郷の指示説に類似する）

このような違いを前述の例（4）、（5）に対応させると、例（4）では指示対象が発話の前から話し手と聞き手の両方の経験の中に存在し、登録済みの対象であるため、指示対象を実世界に存在する事物と結びつけることが可能になっている。一方、例（5）では、「男の子」が談話に初めて登場した時点で、談話モデルに登録されたと考えられる。したがって、第二の文で限定的な形で現れるのは、既に紹介済みの対象であり、話し手と聞き手の記憶に一時的に存在しているためである。談話が始まってから登録された対象であるため、過去の共通の知識を指す「あの」ではなく、照応の役割を果たす中立的な「その」が用いられている。ここで、話し手は、公園で実際に遊んでいた「男の子」を聞き手に知ってほしいわけではなく、単に文の後半に現れた「男の子」が前半の「男の子」と同一の対象であることを聞き手に認識してほしいだけだということに注意する必要がある。

以上のことに基づいて、例文（5）について考えると、第一の文に非限定的な形で現れた指示対象（tʰifl-a-n）は、聞き手にとって、実世界から指定することは不可能な人物である。しかしながら、al- によって、候補者が限定され、第二の文の（atʰ-tʰifl-u）が第一の文の（tʰifl-a-n）と同一の対象を指すことが認識された時点で、その指示対象

は聞き手にとっても同定可能になっている。これはまさに、言語文脈領域による同定である。聞き手にとって、指示対象は「言語文脈外」に存在するのではなく、前の文で導入された「tʰifl-a-n」、すなわち「言語文脈内」に存在する。

この二つの例文の考察から、例(4)は「定名詞句」、例(5)は「限定名詞句」として区別して扱うべきだと考える。「定名詞句」は、話し手と聞き手の間で発話以前から同定可能な共有の知識に基づく名詞句である一方、「限定名詞句」は、共有知識でない情報、すなわち、言語文脈によってもたらされる様々な情報を通して、その指示対象が同定可能になるものである。このことを次の表1で示す。

表 1

特性 名詞句の種類	同定可能性	既知性
定名詞句	+	+
限定名詞句	+	-

- 定名詞句＝同定可能性＝既知性
- 限定名詞句＝同定可能性≠既知性

この関係から考えると、「定名詞句」と「限定名詞句」は、指示対象を認識する過程が異なっているが、どちらも指示対象を同定することができるという点では共通である⁶。ただし、「定名詞句」における指示対象の同定は、発話以前の情報まで遡って、対象に対する「既知性」とつながるのに対し、「限定名詞句」は、そういった同定のし方ではなく、他の過程を経て、指示対象を同定するに至ったと考えるべきである。従って、「定名詞句」は「既知名詞句」と呼ばれることが多いため、「限定名詞

⁶ 東郷(2001)は、フランス語の定名詞句 *le N* の使用条件は、「既知性」 *familiarity* ではなく「同定可能性」 *identifiability* であると述べている。

句」と区別して扱うことが正確である。「定名詞句」は、発話の前に定着している指示対象を検索するので、「既知名詞句」として呼んでも間違いではない。しかし「限定名詞句」は、発話が始まってから指示対象を設定するので、「既知名詞句」と呼ぶことは妥当ではない。

3.3. 限定的な不定名詞句と同定可能性との関係

本節では、「限定的不定名詞句」について考察する。「不定名詞句」とは、二人・二つ以上に名づけられるものであり、特定の人や物を指せないという特徴を持つ。「不定名詞句」は共通的、一般的な意味を表し、外界にある事物を何らかの基準でまとめ、その集合に属する全てのものを一つの呼称で呼ぶ。ある語が不定名詞句として発言される際、聞き手はその抽象的な概念を認識することはできるが、実世界においてその実際の意味を持つ対象を当てはめることはできない。この意味で「不定名詞句」は非限定的かつ同定不可能なものであると考えられる。しかし、ここで全ての不定名詞句が非限定的な意味を表すとは限らない。限定的な意味を持つものもあるということを以下で明らかにする。次の例を見てみたい。

(6) A: どうしたの？

Ma:ða: taffalu?

What are you doing?

B: ボールを探してるの。見てない？

abhaθu ʃan korat-i-n. hal raʔaituha:ʔ

I am looking for a ball-GEN-NUN have you seen it?

A: どんなボール？

aiyu kora?

What ball?

B: 小さくて赤いボールなんだ。

korat-u-n sʔayi:rat-u-n hamra:ʔ-u-n

ball-NOM-NUN small-NOM-NUN red-NOM-nun

この例文では、B が A に見たこともないボールについて話している。B は、自分が目指しているボールが A の既存知識領域の中に存在しないため、A には指定できない対象であることが分かっており、不定名詞句の形で発言した。それは、アラビア語の NUN にも反映されている。会話が続いていっても、*kuratun* に限定辞や定性を表す他の標示は現れず、不定名詞句のまま説明が続けられる。しかし、不定名詞句で説明が続いていても、指示対象は同定不可能というわけではない。アラビア語では、属格関係にある名詞句、すなわちある不定名詞句の後ろの属格関係にある名詞句に限定辞「-al」が付加されている場合、主名詞句が定になる。しかし、後続する名詞句が不定である場合は、主名詞句は定ではなく、「特定の不定名詞句」になる。それが例 (6) である。アラビア語の文に見られるように、*sʿayi:ratun hamra:ʔun* (小さくて赤い) は NUN が付いている不定名詞句であるため、*kotarun* (ボール) も聞き手にとって「未知」であり、同定不可能な対象のはずである。しかし、*kotarun* (ボール) は不定名詞句とはいえ、それに後続する属格関係にある二つの「特定の名詞句」である *sʿayi:ratun hamra:ʔun* (小さくて赤い) で特定化され、語用論的にその意味が限定されている。部屋に大きさが違う、色も異なるいくつものボールがあるとしたら、聞き手が当該のボールを以前見たことがないとしても、その場で与えられた限定的な情報によって、それらのいくつかのボールの中で、対象のボールを特定し、取り出すことができると考えられる。これは、Dik (1981) が提案した「語用論的情報」(pragmatic information) の一つである「文脈的情報 (contextual information)」に基づく同定である。語用論的情報は、主要三区分から成り立っている。

- i 世界または他の可能な世界に関する長期的な情報 (一般的情報 : general information) 。
- ii 関与者たちが知覚するもの、或いは相互作用が起きる状況での経験から派生する情報 (状況的情報 : situational information) 。
- iii その瞬間に交わされた言語表現から派生する情報 (文脈的情報 : contextual information) 。

この例を通して、聞き手にとって未知の情報であり、不定名詞句として導入されるものでも、常に「同定不可能」であるわけではないということが明らかになった。使用される場面、すなわち「語用論的情報」により、その意味が決定されることが多い。したがって、「既知／未知」と「同定可能／同定不可能」は一对一の関係で成立するものではなく、区別される必要があると考える。

3.4. 非限定的な定名詞句と同定可能性との関係

同定可能性の問題は、不定名詞句のみに関わるのではない。本節では、定名詞句でありながら、同定不可能なものである名詞句が存在するというを示す。次の例を参照したい。

(7) Beware of the dog.

犬に注意。

ihðar al-kalb-a.

Beware DEF-dog-ACC

この例文では、dog が英語で the dog、アラビア語で al-kalba、日本語で裸名詞という限定的な形で現れているにもかかわらず、特定の犬を指していない⁷。この近所に注意しなければならない犬がいるという事実を伝えているに過ぎない。実際に犬が存在するという前提があるため、限定辞を伴っている（或いは限定的な意味を示す形式）とはいえ、注意された側が歩いている途中で実際にその犬に遭遇しても、それが当該の犬であると判断できるとは予測できない。犬が単数形で現れているため、唯一性が保たれているにしても、この近所には何匹もの犬が存在するが、注意しなければならないのはある一匹だけであるという意味で捉えられる可能性もある。この意味で捉えたとしたら、聞き手・読み手は犬がどれかと限定できず、同定できなくなるという結果になる。

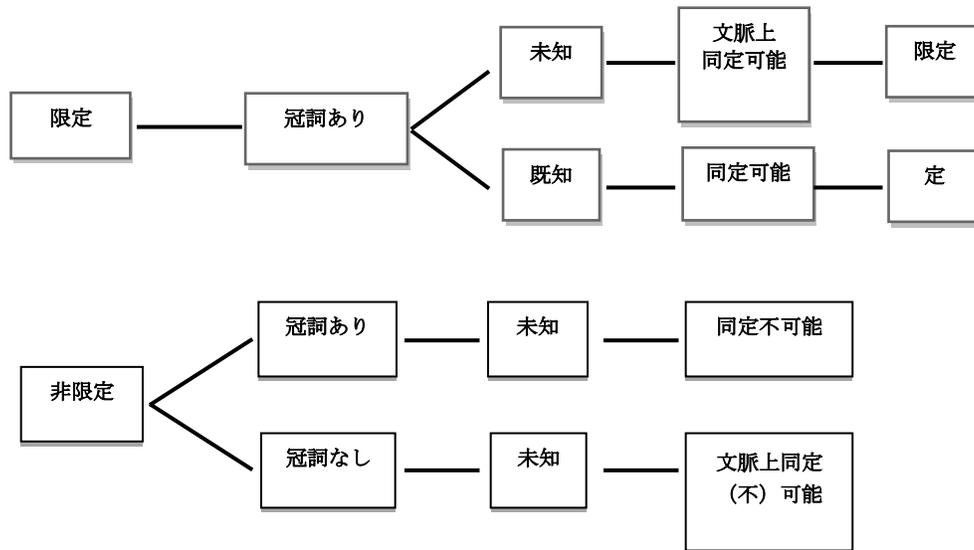
⁷裸名詞については後ほど第五章で詳しく説明する。

4. 結び

本章では、限定名詞句・非限定名詞句と同定可能性との関係について考察してきた。定名詞句＝同定可能性、不定名詞句＝同定不可能性という結びつき方が正確さを欠くという事実がこの考察を通して明らかになった。同定に至るまでの認識の過程が重要で、話し手と聞き手の既知の知識のみならず、発話現場や発話時点に跨る全ての要因も同定可能性に大きな影響を及ぼしている。指示対象の同定を可能にする情報は「言語文脈内」にも存在しており、「言語文脈外」のみに存在しているわけではないということが明確になった。すなわち、指示対象の「同定可能性」は、「言語文脈領域」の中で決定され、実世界で必ずしも他のものと区別され取り出されるとは限らない。そうすると、聞き手には指示対象に関する予備知識がなく、実世界の中から指示対象を指定する資格がなくても、言語文脈上、指示対象を一つまたは一人に限定できた時点で、「同定可能性」の条件が満たされたと考えられる。また、定冠詞が名詞句に付加されていても、その指示対象の同定が保証されているとは言えない。

それから、「限定名詞句」と「定名詞句」を区別する必要があるということについて、本章で詳細に考察した。「定性」という概念は「限定性」と区別されずに、同一のものとして扱われてきた。「限定標示」は、形式的には「定性標示」に似ていても、意味的には「定性」と異なるものであるため、本章では区別して扱うべきであると主張した。例文を考察した結果、冠詞が付いている全ての名詞句が「定名詞句」とは限らないということが明らかになった。一方、冠詞が付いている名詞句は常に「限定名詞句」であり、機能上、発話時点で既知の情報（指示対象）を導入している名詞句を更に「定名詞句」と呼び、そうでない名詞句の場合は「限定名詞句」のままで呼び続ける。更に、冠詞の有無のみが、名詞句の「同定（不）可能性」を判断する際の十分な条件ではない。その判断は、言語文脈による「語用論的情報」に依存するということが本章の考察を通して明らかになった。以上をまとめると次の図1になる。

図 1



本章では、「ア系」指示詞が付いた名詞句は「定名詞句」、「ソ系」指示詞が付いた名詞句は「限定名詞句」であることを示したが、はたして指示詞と名詞句の関係が常にそうであるか否かということについては、第四章以降で詳細に考察していく。第四章、第五章では「限定名詞句」「定名詞句」をそれぞれ詳細に扱う。アラビア語の定性標示「-al」を中心に考察を進めていく。定性標示「-al」の様々な用法を紹介した上で、「限定名詞句」と「定名詞句」に対応する日本語の標示を更に考察対象とする。

第四章

「文脈的照応」における日本語とアラビア語の「限定標示」

—アラビア語の限定標示「al-」を中心に—

1. 概要

第三章では、話し手が談話に導入する指示対象に対する聞き手の既知・未知の情報によって、「定名詞句」に加えて「限定名詞句」というものがあり、「定名詞句」と区別する必要があると論じた。「限定名詞句」は、文中でしか同定されず、実世界に存在する対象と結びつけることは必要とされないのに対し、「定名詞句」は、言語文脈から独立し、言語文脈外の情報に依存することが明らかになった。この分類に基づいて、「限定名詞句」を「文脈的照応」、「定名詞句」を「観念的照応」とそれぞれ関連させ、本章では「文脈的照応」を考察対象とし、次章では、「観念的照応」を考察対象とする。

2. 「限定名詞句」の性質とその標示

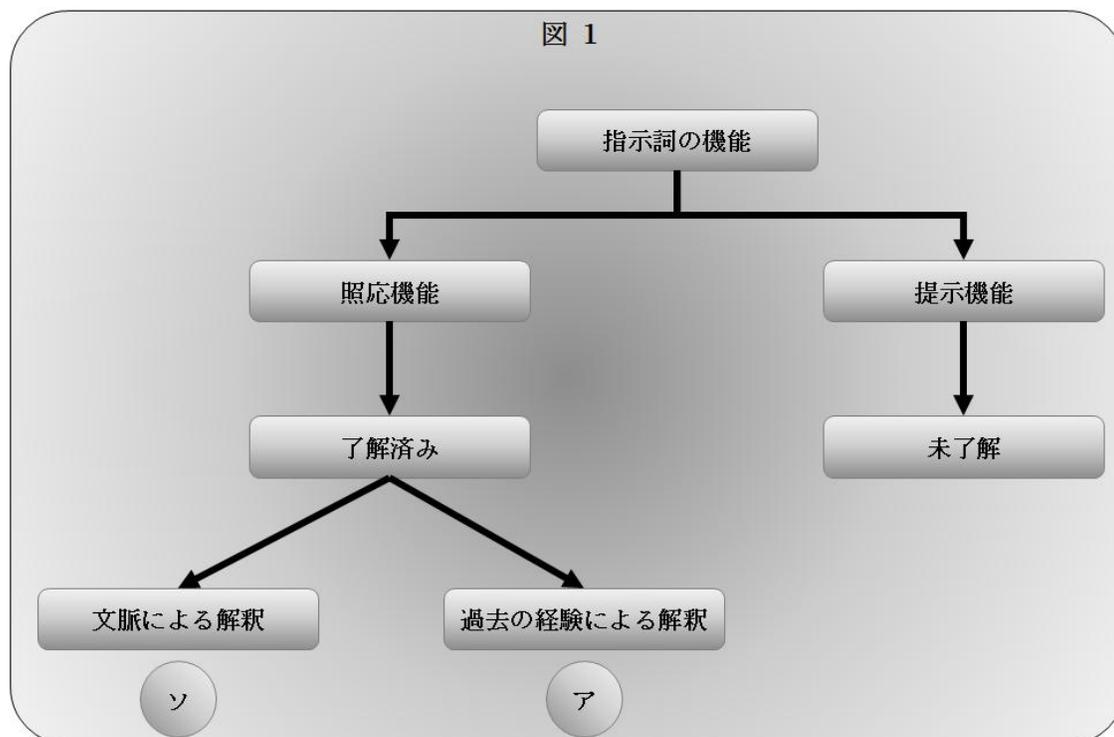
2.1. 照応とは？

本章と次章では、「文脈的照応」「観念的照応」をそれぞれ考察する。そのため、本節では、「照応」、「照応機能」、「照応の分類」などを先行研究から導入する。

李（1994）は、指示詞の機能を話し手と聞き手の指示対象に対する知覚的・観念的な解釈によって二つに分けて説明している¹。それらは、話し手と聞き手によって既に知覚的・談話的に了解済みの対象を指示する「照応機能」と、聞き手にとってまだ知覚的・談話的に了解されていない対象を談話に導入する「提示機能」という二つである。また、「照応」という概念の解釈の仕方は、さらに二つに下位分類している。一

¹ 李（1994）は、現場指示において知覚的に認識され、了解される対象を「知覚対象指示」、文脈指示において談話の流れで観念的に認識され、了解される対象を「観念対象指示」と呼んでいる。後者は、カバー・タームとし、文脈指示はそのカバー・タームの一部を成すものとして「観念対象指示」の下位に入ると述べている。

一つ目は、先行文脈に指示対象がはっきり現れたり、含まれたりすることによる解釈（「ソ」で指示される）、二つ目は、発話時点以前に指示対象が話し手と聞き手の間に過去の経験として導入されることによる解釈（「ア」で指示される）である。このことを図1で図示する。



Halliday and Hasan (1976) によると、談話において、ある要素の解釈が他の要素に依存する場合、談話の結束性 (cohesion) が現れる。更に、”cohesion is simply the presupposition of something that has gone before, whether in the preceding sentence or not. This is known as ‘Anaphora’ (p.14)” と述べている。

山梨 (1992) は、ある言語表現が、後続する言語表現と同一の内容ないしは同じ対象を指す場合、これらの表現は「照応関係」 (anaphoric relation) にあるとしている。前者の表現は「先行詞」 (antecedent)、これに対応する後続の表現は「照応詞」 (anaphor) と呼ばれると述べている。この「照応関係」にある表現は、さらに二つに

下位分類される。文脈指示に関わる「文脈照応」と言語文脈外に関わる「外界照応」である。

「文脈照応」(endophora)とは、この種の照応の対象が言語内のテキストや談話の中に認められる照応である。

(1) 先生は**手紙**をとりだし、**それ**を生徒にわたした。

(山梨 1992)

「外界照応」(exophora)とは、この種の照応詞の先行詞が言語文脈の中には認められず、問題の発話における言語外の場面の中に認められる。

(2) 僕がこの前買った本はどこかなあ。昨日は確かにここに置いてあったはずだけど²。

(山梨 1992)

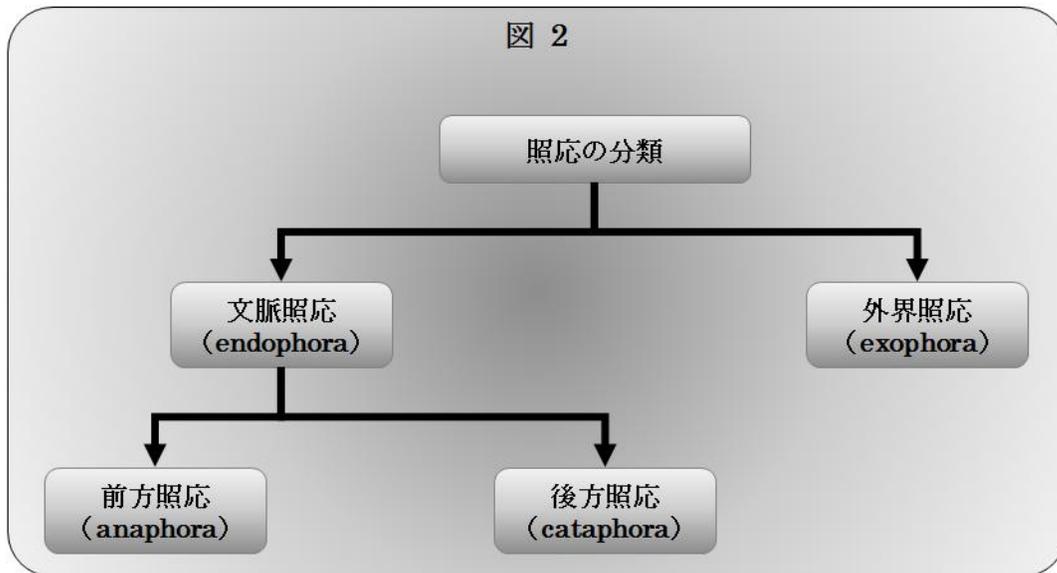
この照応関係のうち、先行詞と照応詞の順序によって、「文脈照応」はさらに二つの照応に分けることができる。先行詞が照応詞よりも前にある場合の照応は、「前方照応」(3)、先行詞が照応詞よりも後ろにある場合の照応は、「後方照応」と言う(4)。

(3) 先生は**手紙**をとり出し、**それ**を生徒にわたした。(前方照応)

(4) いつも**そう**なんだが、彼女は**夕食の後にケーキ**を食べる。(後方照応)

山梨はこのような関係を以下の図 2 で示している。

² 山梨 (1992) から引用した例文であるが、筆者による多少の改変を含んでいる。



今西・浅野（1990）は、照応形は、情報の「既知性」を明示するとともに言語表現の持つ冗長性を削除する機能を持つと述べている。しかし筆者は、上記の「定名詞句」「限定名詞句」の考察や提案に基づき、「既知性」ではなく、「同定」という語のほうが正確かつ包括的であると主張する。「同定」は、「限定名詞句」と「定名詞句」の両方に共通の要因であり、ある名詞句の指示対象の同定が成し遂げられないと、限定性または定性が認められず、不定名詞句として扱われることになる。そして、指示対象の「同定」が確認された時点で、名詞句の機能がそこでとどまり限定名詞句になるか、更に進んで、指示対象が実際のもものと結び付けられて定名詞句になるかという二つの可能性に分かれる。後者は「既知性」を明示するが、前者は「同定」しか明示しない。

本章では、定性標示を持つ言語の一つであるアラビア語を手掛かりにし、日本語においてそれに相当する言語形式を考察する。第一章でも紹介したように、アラビア語には定性を表す方法が六つあるが、そのうちの定冠詞「al-」を本稿の考察対象にする。定冠詞「al-」には様々な用法があり、それによって示される意味が数多くある。以下では、アラビア語の定冠詞「al-」を詳細に紹介した後、日本語に対応させる。

2.2. アラビア語の定性標示について

アラビア語には、定性を表す方法が六つある³。そのうち、語頭に付加する定冠詞「al-」を本稿の考察の対象とする。日本語と対照することにより、日本語の定性標示・限定辞とは何なのかということが明らかになると考える。日本語には、「al-」に対応するものとして、指示詞「コ」「ソ」「ア」があると考え。本章では、「限定名詞句」を中心に考察を行い、それに対応する日本語の指示詞のうち、どれが当てはまるのかということをはっきりさせる。

2.2.1. 定冠詞「al-+名詞句」の機能

「al-」は定性標示であり、指示対象を限定する方法の一つであるとされている。「al-」には二つの用法がある。「照応的な (alṣahdiyya) 用法」と「総称的な (aljinsiyya) 用法」である。

2.2.1.1. 照応的な用法 (alṣahdiyya)

この種の「al-」が付いた不定名詞句はある程度の限定性を帯び、その指示対象は、曖昧で非限定的なものから限定的なものになる。「照応的な用法」は更に三つに分けられる。それらは、「文脈的照応 (alṣahdu ḍḍikri:)」「観念的照応 (alṣahdu ḍḍihni:)」「知覚的照応 (alṣahdu l-hudʿu:ri:)」である⁴。

本章では、「文脈的照応 (alṣahdu ḍḍikri:)」のみを扱い、その性質を明らかにした上で、日本語に適用する。「観念的照応 (alṣahdu ḍḍihni:)」と「知覚的照応 (alṣahdu l-hudʿu:ri:)」を簡潔に説明すると、前者は、その指示対象が実世界に存在するものとして同定され、既知の情報として頭の中で蓄えられるものである。この種類の照応には、過去の経験や出来事が含まれる（第五章で詳細に扱うため、本章ではこの定義にとどめる）。一方、後者は、発話が始まってから指示対象が限定され、指示対象の同定には発話の現場に跨る全ての要因が関わる。この種の照応は、「現場指

³ 筆者は、「定性」よりも「限定性」と名づけたほうがより正確であると考え。

⁴ 「観念的」及び「知覚的」という用語は、李 (1994) から借用している。

示」に対応する⁵。本稿では「知覚的照応 (alṣahdu l-hudʿu:ri:)」を扱わないため、以下の例文の紹介にとどめる。

(5) ʔiʕtʿini: ha:ða: l-kita:ba
Give me this DEF-book
この本ください。

(6) ha:ða: l-rajul-u yabdu: mutṣaban
this DEF-man-NOM seems tired
この男の人は疲れているようだ。

(7) raʔaitu ʕusʕfu:ran fawqa ða:lika l-mabna:
I saw a bird on that DEF-building
あの建物の上に鳥が見えた。

2.2.1.1.1. 文脈的照応 (alṣahdu ððikri:)

「文脈的照応」の「al-」は前述されたものに言及する「al-」である。このタイプの照応では、ある名詞句が文に二回現れた場合に、一回目は非限定的な形で現れ、二回目は「al-」を伴って現れる。この「al-」は、この二つの名詞句の関係を表し、二つ目の名詞句の指示対象を一つに限定し、その指示対象が一つ目の名詞句の指示対象と同じものであることを示す役割を果たす。このことを次の例文で説明する。

⁵指示形容詞を後続する名詞の語頭に現れることが多いが、そうでない場合もある。指示形容詞を後続しない「al-+名詞句」の使用には以下のような例がある。

- i al-yawma yahdʿaru wa:lid-i:
 Today come father-my
 今日お父さんが来る
- ii albardu shadi:dun al-layla
 thecold strong-nom. DEF-tonight
 今夜は非常に寒い
- iii al-ʔa:na yabdaʔu lṣamalu
 Now starts work
 今から仕事が始まる

これらの例文は、西山 (2003) が述べた指示的名詞句と同様の性質を持っている。この種の「al-+名詞句」の意味は発話に依存しており、発話状況が固定されていなければ、指示対象の意味が固定できない (西山 2003:61)。

(8) nazala **matar-u-n.** faʔanʃasha (**l-matar-u**)_{1i} zuru:ʃana:
 it rained rain-NOM-NUN revived DEF-rain-NOM our plants
 雨が降った。(その雨は) _{1ii} 我々の植物を清新にした。

(9) ja:ʔa **dʕaif-u-n.** faʔakrama (**dʕ-dʕaif-a**)_{2i} lwa:lid-u
 came guest-NOM-NUN welcomed DEF-guest-ACC my father-NOM
 お客さんが来た。お父さんは(そのお客さんを) _{2ii} もてなした。

例文(8)、(9)では、後半で繰り返し現れる「al-」を伴った名詞句(以下「al-+名詞句」とする)(l-mataru) (dʕ-dʕaifa)が、前半に登場している非限定的な名詞句(matarun) (dʕaifun)と同一の指示対象を持っていることを示している。このような意味で用いられる「al- +名詞句」は代名詞のようにみなされ、「al-」が付加されていない一つ目の名詞句がその先行詞になる。アラビア語では、人称代名詞が文の表層構造に現れることもあれば、隠れて文の深層構造に現れることもある⁶。深層構造で認識される代名詞は「隠れた代名詞」と言い、語句相互の統語的な関係でその意味が理解できる⁷。この二つの例文で後半に現れている「al-+名詞句」は、意味を変えることなく代名詞に置換可能なため、代名詞に相当する機能を持つと見なして良い。このことを次の例で示す。

(10) nazala **matar-u-n.** faʔanʃasha (**li**) zuru:ʃana:
 it rained rain-NOM-NUN revived our plants
 雨が降った。(その雨は) _{1ii} 我々の植物を清新にした。

⁶人称代名詞には、独立した形式と語尾に付加される拘束形態素の二種類がある。ここでいう人称代名詞は後者の拘束形態素である。拘束代名詞には文の表面に現れる代名詞と隠れた代名詞の二種類がある。

⁷アラビア語では「隠れた代名詞」と「省略された代名詞」は異なった概念として定義される。「省略された代名詞」は、もともと文に現れていたが、何らかの理由で省略され無視された代名詞である。「隠れた代名詞」は、そもそも文の表層に現れることができないが、統語的に理解することができる。「隠れた代名詞」になり得るのは、主語の位置にある語のみである。一方、「省略された代名詞」になり得るものは、主語以外の位置にある語である。両者の性質が異なるからこそ、あえて「省略」ではなく、「隠れた」という用語を用いている。

- (11) ja:ʔa dʕaif-u-n. faʔakrama-(hu)_{2i} lwa:lid-u
 came guest-NOM-NUN welcomed-3SG.M myfather-NOM

お客さんが来た。お父さんはその（お客さんを）_{2ii}もてなした。

例 (8) の (l-mataru) と例 (9) の (dʕ-dʕaifa) は、(10) と (11) でそれぞれ隠れた代名詞と拘束代名詞になっているが、意味の変化は生じていない。(8) の前半の名詞句である (matarun) は非限定的な名詞句であり、どのような雨であるかは示されていない。しかし、後半の「al-+名詞句」は限定的な名詞句であり、その指示対象は前半の非限定的な名詞句に限られている。例文 (9) も同様である。後半の「al-+名詞句」の指示対象は、前半の非限定的な名詞句であるが、実際の人物は指していない。この限定的な名詞句の指す意味は、文前半の非限定的な名詞句の指す意味に限られているため、指示対象の意味はあくまで文のレベルでしか同定されておらず、文を超えて、外界に存在する事物と結び付けられているわけではない。つまり、「al-+名詞句」と先行の名詞句の間には同一指示関係が成り立っていると言える。

2.2.1.2. 総称的な用法 (aljinsiyya)

この種の「al-」が不定名詞句を伴うと、その名詞句が持っている意味そのものを表す機能を持つのみで、照応を表さない。この種の「al-」が表すのは、百科事典的知識の一般的知識で、話し手と聞き手の間に共有されている情報を提供するということがある。この種類には三つの用法があり、以下では簡略に紹介する。

I その種に所属する構成要因の全てを表すもの

- (12) **an-najmu** mudʕi:ʔun biða:tihi
 DEF-star shining by itself
 星は自らで光るものだ。

II その種の構成要因が持つ一つの特徴の総計や包括を表すもの⁸

⁸ 榮谷 (1998) も参照。この用法は隠喩や誇張で使われる。

- (13) Anta r-rajul-u Gilman
You DEF-man-NOM knowledge
あなたは知識の点で（全ての）男だ。

Ⅲ ものの本質や性質を表すもの⁹

- (14) as^s-s^u:fu ayla: mina al-qutⁿ-i
DEF-wool more expensive than DEF-cotton-GEN
毛は綿よりも高い。

以上で定冠詞「al-」の様々な用法を紹介した。その中で「照応的用法」に属する「文脈的照応」を本章の分析対象とする。様々な例文を分析しながら、日本語に対応させることによって、日本語の限定標示を明らかにする。

2.3. 例文のデータの考察

2.3.1. 結果の全体的概要

アラビア語の「al+名詞句」の「文脈的照応」に対応する日本語の言語表現を考察するために、40文のアラビア語の例文を作成・引用し、それらを日本語に訳した。文の前半の非限定的な名詞句が現れる位置が後半の名詞句の標示に影響を及ぼすかどうかを包括的に考察するため、文の前半に導入される非限定的な名詞句が現れうる様々な位置について、役割及び時制の面から九つの可能性を考慮し、それぞれにいくつかの例文を作った。これらの可能性は、

1. 主語＋過去→7文
2. 主語＋現在→4文
3. 主語＋未来→4文
4. 目的語＋過去→14文

⁹ Tawa (1993) は、このタイプの名詞句を non-definite と言い、人間が頭の中に蓄えているものの本質や一般的なイメージをスキーマを呼んでいる。スキーマは物の詳細には至らない。

5. 目的語＋現在→3文
6. 目的語＋未来→2文
7. 前置詞句＋過去→4文
8. 前置詞句＋現在→1文
9. 前置詞句＋未来→1文

である。ここで次の仮説が立てられる。

仮説

「al-＋名詞句」に対応する日本語の言語形式が日本語における「文脈的照応」の標示であり、それを、名詞句を限定する機能がある限定辞（または限定標示）と呼ぶ。

以下で分析対象の例文のデータを考察する。まず、限定標示の全体の使用率を、次の表1にまとめる。

表 1

指示詞 数と割合	この	その	この・その 両方可	この・その 両方不可
40の内	9	24	6	1
割合	22.5%	60%	15%	2.5%

全体的に見ると、「その」が60%以上の割合を示している。

次に、役割と時制による使用率を以下の表2にまとめる。

表 2

役割と時制	例数	この	その	この・その
主語＋過去	7	1	5	1
主語＋現在	4	3	1	0
主語＋未来	4	1	2	0
目的語＋過去	14	3	9	2
目的語＋現在	3	0	1	2
目的語＋未来	2	0	2	0
前置詞句＋過去	4	1	3	0
前置詞句＋現在	1	0	1	0
前置詞句＋未来	1	0	0	1

以上のデータから見ると、「主語＋現在」以外は、「ソ」の使用が一般的に優先的であった。ところが、「主語＋現在」の組み合わせの場合には、「コ」の使用が「ソ」よりも優先的であるように見られた。次の三例を参照されたい。（以下の例文で用いられる記号の意味として、(?)は他方のほうが自然・容認度が高い、(△)は他方のほうが使いやすい、(*)は不自然、とする）。

- (15) yaʔti: ila maharaga:ni 'kan' **mumaθθilu:na** min gami:ʕi lbila:di, wa yuʕtabaru min ahammi taqa:li:di ha:ða: lmahraja:ni muru:ri **l-mumaθθili:na** fawqa lbusa:tʕi laħmari qabla d-duxu:li ila mabna lmahraja:ni.

カンヌ映画祭には、世界中から多くの俳優がやってくる。{これらの俳優/△それらの俳優}が言うには、赤い絨毯の上を歩くことは、伝統的な行事となっている。

- (16) fi fasʕli lxari:fi fi misʕra tahubbu **riya:h-un** munʕishatun tulatʕtʕifu min hara:rati sʕsʕaifi. taʔti: **al-riya:hu** ʕa:datan min algihati sh-shama:liyyati lyarbiyyati.

エジプトでは秋に夏の暑さを緩める涼しい風が吹きます。{この風／?その風}はたいてい北西の方向から来ます。

- (17) yaʔti: **fanna:nu:n** min muxtalafi anha:ʔi lʕa:lami ila misʕra lihudu:ri maharaga:ni lqa:hirati s-sinima:ʔiyi d-duwaliyi. wa yantahizu **l-fanna:nu:n** lfursʕata lilistimta:ʕi bimaʕa:limi misʕra s-siya:hiyyati.

カイロの国際映画祭に参加するため、世界各国から多くの芸能人がエジプトにやってくる。{これらの芸能人たち／?それらの芸能人たち}は、その機会を活かし、エジプト観光も楽しんでいる。

例文(15)、(16)、(17)では、前半に非限定的な形で登場している「多くの俳優」「風」「芸能人」が主語の位置に現れている。一方、後半で限定的な形を帯びる名詞句は、「コ」を伴っている。しかし、文中における役割と時制によって「コ」が優先的に使用されるか否かを判断するには、さらに、他のデータを分析する必要がある。そこで、主語の位置に置かれている単数の名詞句に限って例文を作成したが、これはかなり困難な作業であった。主語の位置に置かれた単数の名詞句が、現在形において非限定的な形で現れるのは、他の時制に比べ、かなり数が限られているように思われる。現在形を使って何かを説明しようとする場合、指示対象は知覚的に同定できることが多い。したがって、指示対象を初めて見聞きしたとしても、眼前で確認し他と区別できる状況にあるため、ほとんどの場合は最初から限定名詞句で導入される。そこで、コーパスを使うことにし、『新潮文庫の100冊』【Sin100より、あすなろ物語／井上靖(402頁):106305(20ページまで)および、芥川龍之介(9ページまで)】から該当の例文を検索した。ところが、検索の範囲ではこの条件に当てはまる例文が見当たらなかった。

以上のデータから考えると、この現象を支持する例文が十分見つからなかったため、「主語+現在」という組み合わせだけは「コ」が優先的に用いられると判断することはできない。

しかし、「コ」の性質について広く考えると、現場指示において、話し手が現在の発話で自分に近いものや自分の勢力範囲内にあるものを指すのに「コ」を用いるので、文脈指示においても、話し手が現在の状況を説明するときには、「コ」が用いられやすくなると推測できる。今回は、データがこれ以上手に入らなかったため、推測に留めておく。

2.3.2. 数と指示詞選択との関係

今回「主語＋現在」という統語的な要因は、指示詞の選択に決定的ではなかったため、名詞句の「単数・複数」が「コ」「ソ」の使い分けに優先的な要因なのではないかと考えた。

分析対象の例文においては、数によって指示詞の使い分けが見られた。以下に、分析対象の例文に現れた複数形の例文をいくつか挙げる。

- (18) yaʔti: ila maharaga:ni 'kan' **mumaθθilu:na** min gami:ʕi lbila:di, wa yuʕtabaru min ahammi taqa:li:di ha:ða: lmahraja:ni muru:ri **l-mumaθθili:na** fawqa lbusa:tʕi laħmari qabla d-duxu:li ila mabna lmahraja:ni.

カンヌ映画祭には、世界中から多くの俳優がやってくる。{これらの俳優／△それらの俳優}が言うには、赤い絨毯の上を歩くことは、伝統的な行事となっている。

- (19) fi atʔtʔari:qi baina madi:natai yirna:tʔa wa almeriyya fi espanya tu:jadu **tʔawa:ħi:nu** hawa:ʔin baida:ʔun kabi:ratun. tustaxdam **atʔ-tʔawa:ħi:nu** litawli:di lkahraba:ʔi.

スペインのグラナダとメリアの間を走る道路には、大きくて白い風車がいくつもある。{△これらの風車／それらの風車}は発電に使われる。

- (20) bana: alfara:ʕinatu **ahra:ma:t-in** ʕazʕi:matin. ashharu **l-ahra:ma:ti** hiya xu:fu: wa xafraʕ wa manqaraʕ alka:ʔinu:na bimuha:fazʔati lji:zati.

古代エジプトのファラオは巨大なピラミッドを建築した。{これらのピラミッド／それらのピラミッド} で最も有名なのは、ギザの三大ピラミッドであるクフ王、カフラー王、メンカウラー王のものだ。

6つの例文の内、「コ」のみが2文、「ソ」のみが2文、どちらも可が2文という結果が得られた。この結果から見ると、複数形は「コ」で指しやすいように考えられる。このことを立証するためには、さらにデータを分析する必要がある。そこで、複数形を中心に例文を作成し、以下でそのデータの分析結果を考察する。

データ分析

複数形では連体詞「コ」の容認度が高くなるのではないかという予測が得られたため、複数形を中心に13文のアラビア語の例文を作成し、それを日本語に訳して分析した。その結果、「コ」を用いた例文は6文、「ソ」は6文、どちらも可能な例文は1文、という結果が得られた。つまり、使用率が半々であった。

- (21) tagamhara t'ulla:b-un ama:ma maqarri lga:miṣati bilamsi. Wa t'a:laba t'ullabu bistiqa:lati ra?i:si lga:miṣati.

昨日大学の前に多くの学生が集合した。{これらの／*それらの} 学生は学長に辞職を求めた。

- (22) ra?aitu at'fa:l-an yalṣabu:na lkurata fi sh-sha:riṣi. fanabbahtu l-at'fa:la ṣalaxut'u:rati ha:ḍa: lfiṣli.

道路でボール遊びをしている子供たちを見た。いかに危険なのかということ（{△これらの／それらの} 子供たちに）注意した。

また、ニュースのニュアンスがある例文は、「コ」を取りやすいという傾向が見られた。

- (23) waqafat fi larjinti:ni ha:diθatun bashiʕatun; haiθu isʕadama qitʕa:run birasʕi:fi lmaħatʕati. wa qad tuwufiya fi l-**ħa:diθati** ma: yaqrubu min arbaʕi:na shaxsʕan wa usʕi:ba akθaru min subʕumaʕatin a:xari:n.

アルゼンチンで、電車がホームに突っ込む悲惨な事故が起きた。{この事故／△その事故}で、およそ400人が死亡し、700人が怪我をした。

- (24) alqa: almaglisu lʕaskariyyu **baya:n-an** ha:mman bilʕamsi. sʕarraħa fi l-**baya:ni** anna intixa:ba:ta r-riʕa:sati satatimmu fi niha:yati shahri yunyu: al-qa:dimi.

昨日軍事会議が重要な発表をした。{この発表／△その発表}によると、大統領選挙は6月下旬に行われるとのことだ。

以上の結果をまとめると、「文脈的照応」においては、「その」の方が一般的に使用頻度が高いという傾向が見られた。時制による「コ」「ソ」の使い分けははっきりしなかったが、数やニュース的な情報によって、「コ」「ソ」の使い分けが相対的に見られた。本稿の目的は、文脈的照応における「コ」「ソ」の使い分けを考察することではなく、日本語の「限定辞」及び「定性標示」とは何なのかを明らかにすることであるため、「コ」「ソ」の使い分けに関する分析はここで止めたい。以上を要約すると、以下のようになる。

- アラビア語の「al-+名詞句」における「文脈的照応」の用法に対応する日本語の指示詞のうち、「ソ」が定番型であるのに対して、「コ」は条件付きの型である。「ソ」は一般的に幅広く用いられるが、特定の条件の下では、「コ」が優先されることがある。

3. 結び

本章では「限定名詞句」の性質と標示について論考した。アラビア語では、統語的には、定冠詞「al-」が定性標示であると定められているが、語用論上は、限定のみを表したり、定性を表したりすることができる。そのため、アラビア語でも、「al-」が統語的に定冠詞であるとしても、その用法は、「限定辞」と「定性標示」に分類すべ

きである。本章で扱った「文脈的照応」は「限定名詞句」の特徴であり、「定名詞句」の特徴ではない。さらに、「文脈的照応」において、「ソ」も「コ」も名詞句を限定する「限定標示」だが、「ソ」が定番型であるのに対して、「コ」は特定の条件下で優先される。このように、「ソ・コ」は日本語の「限定標示」として機能すると結論付けられる。

次章では、アラビア語の「観念的照応」を手掛かりにし、日本語の対応する標示を考察する。用法、それから意味、様々な観点から、それらが日本語の定性標示と言えるかどうかを明らかにする。

第五章

「観念的照応」における「裸名詞」と「あの+NP」の「定性」の 性質の違い

—アラビア語を背景にした分析—

1. 概要

第四章では「文脈的照応」を考察した結果、「文脈的照応」を「限定名詞句」と関連させ、日本語の指示詞「ソ」「コ」が「限定辞」であるということを明白にした。

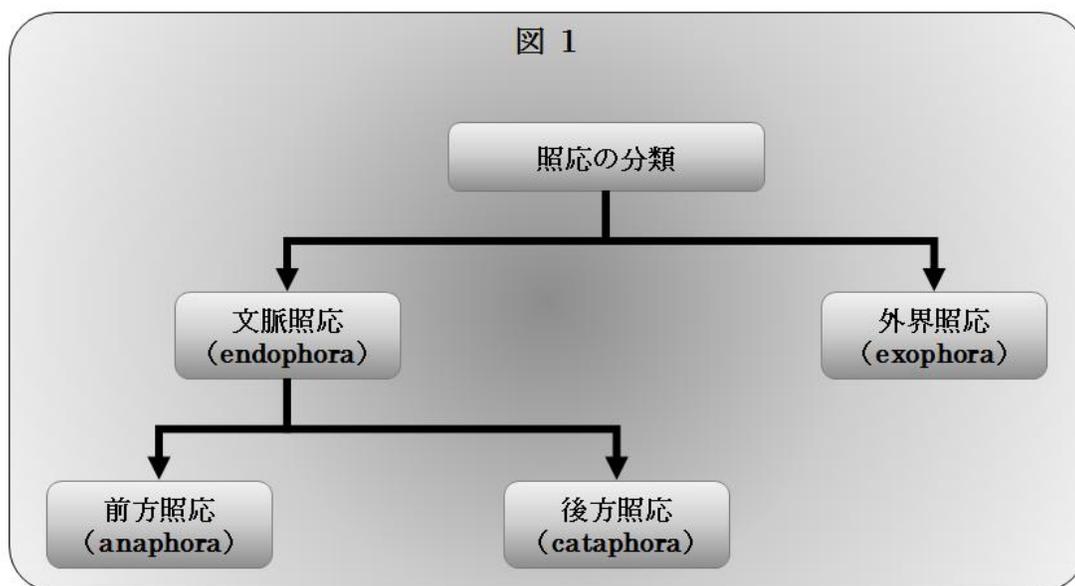
「定名詞句」においては、話し手と聞き手に共通の知識があることが原則であるため、本章では、「定名詞句」の特徴と仮定している「観念的照応」を考察対象にする。従来の先行研究では、「観念的照応」といえば、指示詞「ア」が連想されるが、今回は、「裸名詞」も「あの+NP」も「観念的照応」として機能する、という新たな見解を提案する。それから「裸名詞」、「あの+NP」のそれぞれが表す「定性」の性質の違いを考察し明らかにする。

2. 「文脈的照応」と「外界照応」について

山梨（1992）は、「照応関係」にある表現は、「文脈的照応」と「外界照応」に分類されると述べている。「文脈的照応」については第四章で詳しく紹介した。「外界照応」について山梨は、その先行詞が言語文脈の中には認められず、問題の発話における言語外の場面の中に認められると述べている。

- (1) 僕がこの前買った本はどこかなあ。昨日は確かにここに置いてあったはずだけど。
(山梨 1992)

山梨（1992）は照応の分類を以下の図 1 でまとめている。



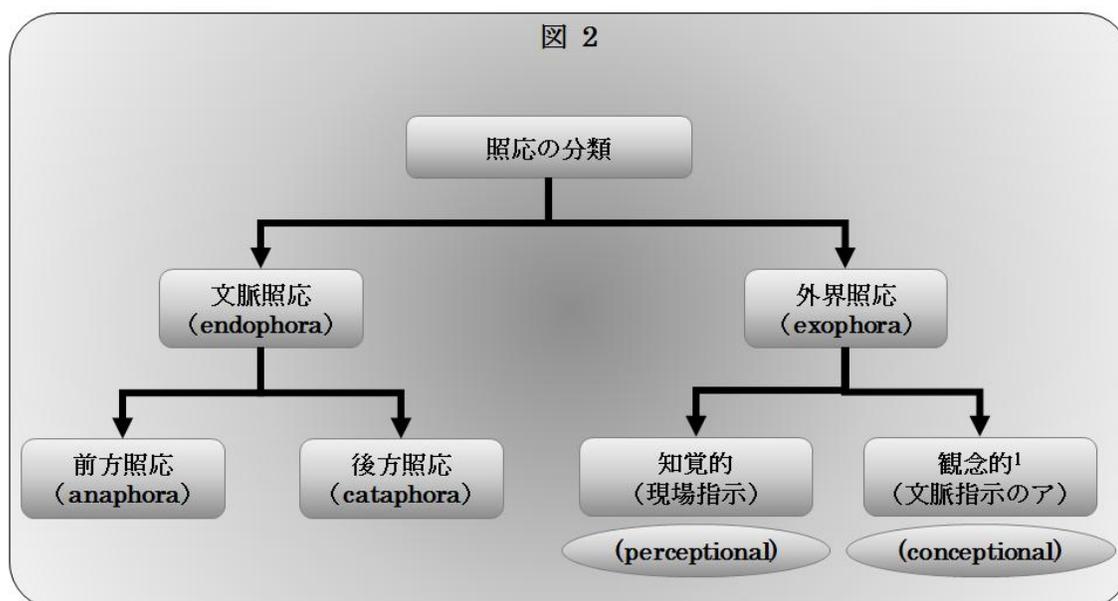
(再掲)

Halliday and Hasan (1976) の照応の説明に基づいた山梨のこの分類は、「外界照応」には、「現場指示」に相当するものしか存在しないということを意味する。しかし本章では、「外界照応」はより包括的な概念であり、その中に「現場指示」と「文脈指示のア」が含まれていると考える。両者の指示対象が存在する領域は言語文脈内では決定されず、言語文脈外である実世界の中から決定されるのである。従って、テキスト内の結束性には関わらない。”Exophoric reference is not textually cohesive” (Halliday and Hasan, 1976:59)。

「現場指示」が、発話の現場に存在する特定の指示対象を指示するのと同様に、「文脈指示のア」も、言語文脈に依存せず、過去の経験や百科事典的知識に基づいて、言語文脈外に存在する実際特定の人物や物事、実際に起きた出来事や知識を指示する。「現場指示」において、話し手が指で聞き手の注目を指示対象の方向に向かせるのと同様に、「文脈指示のア」においても、話し手は聞き手の注目を、過去に二人ともが経験したことや場所などに向けさせるために、その対象を「ア」で指示する。このように考えると、「ア」はあたかも昔の特定の出来事を指示しているかのように考えられる。話し手と聞き手が、ある事柄について終始「ア」で指し続けるということ

は、二人の知識の中から同一の対象が取り出され、その姿を目の前に見ているかのように語り合っていると言える。本稿では、「文脈指示のア」を「観念的照応」と名づけ、「観念的照応」を中心に調査を行い、それによる「定性」の標示を考察する¹。

以上の提案に基づき、山梨の図①を補足し、以下の図 2 を示す。



3. 「外界照応」に属する「観念的照応」の用法について

¹ 国立国語研究所 (1981) では、観念対象指示の場合にも「コ」「ソ」「ア」の全てが現れ、「コ」と「ア」は、その正体が自分に良く分かっている場合にしか使用されないのに対し、「ソ」ははっきりと正体が分かっていないものに使用されると述べられている。

(i) A: 僕が行っている英会話学院にハワイの先生がいるんだけど、その先生の授業とても面白いんだ。

B: その先生、どんな先生なの？

しかし、本稿では「文脈的照応」と「観念的照応」を区別して扱い、(i)の「ソ」のこのような用法は、「文脈的照応」に属しており、「文脈指示のア」のみが「観念的照応」に属していると考えられる。

本章では、定性標示を体系的に持つ言語であるアラビア語を背景にして分析を行うことが目的であるため、アラビア語の限定辞「-al」の分類に倣って、日本語の指示詞を分類する。

3.1. アラビア語の限定辞「al-」について

第四章でも紹介したように、限定辞「-al」には「照応的な (alṣahdiyya) 用法」と「総称的な (alḡinsiyya) 用法」がある。「照応的な用法」は更に、「文脈的照応 (alṣahdu ḡḡikri:)」 「観念的照応 (alṣahdu ḡḡihni:)」 「知覚的照応 (alṣahdu l-ḡudʿu:ri:)」 の三つに分けられる。「文脈的照応」は第四章で詳細に扱った。本章では、アラビア語の「観念的照応 (alṣahdu ḡḡihni:)」のみを扱い、その性質を明らかにした上で、日本語に適用する。

3.1.1. 観念的照応 (alṣahdu ḡḡihni:) の概要

この種の照応は文脈的照応とは異なり、「al-」を伴った名詞句「al+名詞句」の指示対象は言語文脈のレベルを超え、実世界に存在するものとして同定される。この種の名詞句の指示対象は話し手と聞き手の間で発話時点の前から限定されており、既知の情報として脳内に蓄えられている。その指示対象は、話し手と聞き手の間に共有されている過去の経験や出来事を含む (Hassan 1974)。

「観念的照応」においては、第一発話から名詞に「al-」が付いており、定記述を表すという点で、文脈的照応とは性質が異なっている²。つまり、Hawkins (1978) が指摘した「第一発話の定記述 (first-mention definite description)」に相当する³。

日本語について考えてみると、このような照応の性質を持つ言語表現は、指示詞「ア」であると考えられる。久野 (1973b) は、アー系列について、「その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる」と述べている⁴。つまり、アラビア語の「観念的照応」、いわゆる、話し手と聞き

² 「文脈的照応」についての詳細は、第四章を参照。

³ 庵 (1994) は、「文脈的照応」による限定情報を「定情報」、「観念的照応」による定情報を「論理的 - デフォルト (logical-defaultive definite 'LDD) 」と名づけている。

⁴ 金水敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6巻4号 pp.73より引用。

手の間に共有されている情報を指す機能を持つものは、日本語では指示詞「ア」であると思われる。

- (4) a. alyawma ðahabtu ila **tilka** l-madrasat-i
 today i went to that DEF-school-GEN
 b. Today I went to **that / the** school.
 c. 今日は**あの**学校に行った。

しかし、例(4a)を見ると、「al+名詞句」の前に「tilka」という指示詞が使用されている。アラビア語の指示詞の性質から考えると、遠称の指示詞「ða:l̩ika (MAS.SING.男性単数)、til̩ka (FEM.SING.女性単数)」における形態素「l̩」は、指示対象が遠くにあることを意味し、話し手の現在の意識に存在しないことを指示する時によく使われる (Alsaiyouti 1998: 249)。更に、Jumua (2002: 142-143) は、指示詞が指示対象を唯一的に脳に取り戻すのに使用されると述べている。つまり、指示詞は、話し手の現在の意識には存在しないが、長期記憶には保存されている対象が、場面に応じて、現在進行中の会話に一時的に取り戻されるのに使用される。この例から、日本語の「あの+名詞句」は、アラビア語の「指示詞+al+名詞句」に対応するということが分かる。

ところが、アラビア語では、「観念的照応」において、「al+名詞句」の前に指示詞が常に置かれるというわけではない。むしろ、場面や条件がなければ、指示詞を使わずに「al+名詞句」のみが用いられる方が一般的である。以下で、「al+名詞句」のみを用いた例文をいくつか考え、それに対応する日本語の言語表現を考察する。

- (5) ðahabtu ila l-kulliyat-i wa qa:baltu ʔasʕdiqa:ʔi:
 i went to DEF-school-GEN and i met my friends
 (i) 学校に行って、友達に会った
 (ii) *あの学校に行って、友達に会った⁵

⁵ 「*」は非文法的ではないが、意味が異なる。後ほど、詳細に考察する。

- (6) hadʕara l-ʔusta:ð-u
 Came DEF-teacher-NOM
 (i) 先生が来た
 (ii) *あの先生が来た
- (7) ʔakmaltu qira:ʔata l-qisʕsʕat-i
 i finished reading DEF-story-GEN
 (i) 小説を読み終わった
 (ii) *あの小説を読み終わった

例文 (5)、(6)、(7) のそれぞれに現れている「l-kulliyat-i」、「l-ʔusta:ð-u」、「l-qisʕsʕat-i」は外界的照応を表す「al-+名詞句」であり、それらは、発話時点の前から話し手と聞き手の間の共通の知識である特定かつ限定可能な人物や場所などを表している。これらの限定性は、発話者の間で過去に設定された共有の出来事や経験に基づいて発生しており、この共有の出来事や経験に注目を向けさせるのは、この「al-」であって、他の単語ではない。

しかし、上記の例を見ると、アラビア語の各文に対して二通りの解釈が可能である。(i) のように「裸名詞」を使った解釈と、(ii) のように「あの+NP」を使った解釈で、むしろ、(i) の解釈のほうが一般的である。ほとんどの先行研究では、「観念的照応」が取り上げられる際に、指示詞「ア」しか使われないとしている(李(1994)、庵(1994、1999))⁶。また、東郷(2000)は、「ア系指示詞は、共有知識領域に存在する対象をさす。また共有知識領域に存在する対象をさすことができるのは、ア系に限られる」と述べている。本章では従来の見解を展開し、「観念的照応」には、「裸名詞」と「あの+NP」という二種類があると提案する。上記の例文の日本語の各文によって示されている共有の人物や事物が存在する領域は、どのような性質を持つのであろうか。また、それらの意味の違いは何か、どのようにして日本語の定性に結び付けられるのかということについて、以下で詳細に論考する。

⁶ 「観念的照応」は「観念対象指示」と呼ばれることもある。

3.2. 裸名詞が持つ様々な意味

裸名詞は大まかに「定名詞」「不定名詞」「総称名詞」のそれぞれを表すことができる⁷。以下の例は、同じ裸名詞「先生」が三通りの用法で現れることができることを示す。

(8) (同じ学科の同級生の会話)

A: その辞書、どこから持ってきたの?

B: 先生に貸していただいたんだよ。(定名詞)

(9) A: 来月から新しい先生が来るんだって

B: えっ、どんな先生?どの科目教えてくれるの?(不定名詞)

(10) A: 先生って尊敬すべきものだね!

B: そうだね!本当に大変な職業だよね!(総称名詞)

例(8)では、同じ学科の二人の同級生が教えてもらっている先生について話しており、その先生のごことは、話し手・聞き手が共によく知っており、既知の情報として会話に登場している。つまり、先生は会話以前から共有知識の領域に存在している。一方、例(9)では、話し手と聞き手が今まで知らなかった新しい先生について話している。同じ裸名詞「先生」でありながら、話し手と聞き手の間の共有知識の領域に存在しない未知の人物であり、新規の情報として登場している。Wallace (1976) は(8)のような既知の情報を“already activated”(活性化済み)、(9)のような未知の情報を

⁷ 庵(1994)は、「観念指示」と「非観念指示」を大別している。「観念指示」には、「あの+NP」(i)があるのに対し、「非観念指示」には、「総称指示」(ii)、「唯一指示」(iii)、「デフォルト的指示」(iv)、「連想的指示」(v)があるとしている。

(i) あの試合は悔しかったね。

(ii) 馬は良く動く。

(iii) 太陽が西に沈んだ。

(iv) 首相が辞めた。

(v) フレッドが教室で面白い本の話をしていた。彼は著者と仲がいい。

裸名詞は、「定名詞」「不定名詞」に加え、庵の「非観念指示」のカテゴリーに入る四つの種類の名詞も表すことができる。しかし、本稿では、このような分類は扱わず、上記のように大まかに「定名詞」「不定名詞」「総称名詞」に分けるにとどめる。

“newly activated”（新規に活性化された）とそれぞれ呼んでいる。例（10）では、話し手と聞き手が「先生」という性質を持つ一般的な人物について話している。ここに現れている「先生」は既知の対象を指すこともなく、未知の対象を指すこともない。それは、「先生」というカテゴリーに入る全ての人物を指す「総称的な用法」（Generic）と呼ばれる⁸。

これらの三種類の裸名詞が、どのような状況の下で使い分けられるかということは、本稿の目的ではないため、上記の紹介にとどめる。

上述したように、本章では、「あの+NP」に加え、「裸名詞」も「観念的照応」として機能することができるということを提案する。この「裸名詞」が指す対象は二通りの用法によって同定される。一つ目は、実世界から具体的な対象を特定する用法である（例 8）。この用法は、話し手と聞き手の共有の知識が必須条件となる。二つ目は、具体的なものではなく、総称的・百科事典的情報に基づいた用法である（例 10）。この用法では、話し手と聞き手の共有の知識は必須条件ではない。本稿では、「あの+NP」の使用条件と同様の具体的な対象を指示する「裸名詞」の一つ目の用法のみを扱う。

3.3. 「あの+NP」と「裸名詞」が表す定性の性質の違い

3.3.1. 先行研究

ア系列指示に関する研究は従来より幅広くなされており、「発話時前に話し手と聞き手の間の共有の知識を指す役割を持つものは「あの」である」というようなものが一般的な定義である（久野 1973、東郷 2000、李 1994、金水 1988、堀口 2004）。一方、定情報を提供するものとして機能することができる「裸名詞」に触れた研究はそれほどなく、「定性」の面を扱った研究はほとんどない。本章では、「裸名詞」に触れている先行研究を参考にしながら、「観念的照応」に対応する「あの+NP」と「裸名詞」による定性の性質の違いを明らかにする。

⁸ ある名詞の「総称的」「非総称的」という性質は、名詞の種類によって決まるものではなく、名詞とその述語との関係で決まるものである。（Wallace 1970: 189）

(Lyons 1999: 53) は以下のように述べている。

“The appearance or omission of the article cannot be fully predicted, it is largely determined by the accessibility of the referent. If the previous mention of a referent is considerably far back in the discourse, it is less easily activated by the hearer; and if other, similar, referents have occurred in the intervening discourse, these can interfere with the hearer’s identification of the intended referent. In such circumstances the speaker tends to use the “heavier coding” of an article-marked noun phrase as a way of alerting the hearer to the need to find the referent and thus helping him in the task. In other words, a bare noun phrase is used when the referent is judged to be easy to access, and a definite-marked noun phrase when more effort seems to be required.”

また、指示対象の同定により努力が必要な場合には、代名詞が使用される。冠詞または代名詞は、聞き手の注目を現在の状況よりも、先行の談話に導くと述べている。

Dik (1981: 128) は、“A linguistic expression may also have the effect of making the addressee aware of some piece of information *p* which he did possess, but was not thinking of at the given moment.”と述べている。

吉田 (2005) では、「裸名詞」は、談話理解における話題の継続性を担う役割を持つものとして考えられており、「裸名詞が情報を維持するための認知的に最も単純で安定した形式であり、話題の整合性を形成するのに好都合である」と述べられている。

また、話題へのアクセスを可能にする要因について、Givon (1983: 11) は次のことを言っている。

I ある知識や情報が脳に登録されてからどのぐらい経っているか。

ある話題がもともと定情報ではあったが、しばらくアクセスされていない状態にあるとする。しばらくたった後、再びその話題にアクセスしようとしても、話題の同定が難しくなる。

II 他の話題に妨げられる可能性がある。

意味論的に似ているいくつかの話題が登録されていれば、特定の話題を同定することが困難な作業になる。

(Chafe 1976)

「旧知識」は、発話時に聞き手の意識に存在すると話し手が想定する知識のことである。話し手は、聞き手に向かって話をする際に、聞き手の長期記憶に蓄えられている知識よりも、聞き手の脳の一時的な状態を考慮して話を進める。つまり、ある知識が聞き手の長期記憶に存在するといっても、「旧知識」として扱われるべきであるとは限らない。更に、話し手は、聞き手の意識に存在すると想定している知識のみならず、聞き手に正確に指示対象を同定する能力があるということについても考慮しながら、話をすべきである。話し手は、ある対象が聞き手の現在の意識に存在しないと判断した際に、その対象を「旧知識」として扱うことをやめるべきである。そこで、Halliday (1967) が提案した「復元可能性 (recoverability)」の概念が適用される。

「復元可能性」とは、聞き手がある対象について考えなくなったとしても、つまり「旧知識」として扱えなくなったが、記憶中でその対象へのアクセスがまだ可能であり、更に、現在の意識に復元することが可能であるという概念である。以下の例を参照したい。

- (11) a. alyawma ðahabtu ila l-madrasat-i
today i went to DEF-school-GEN
b. Today I went to (φ) school.
c. 今日は (φ) 学校に行った。

- (12) a. alyawma ðahabtu ila **tilka** l-madrasat-i
today i went to that DEF-school-GEN
b. Today I went to **that / the** school.

c. 今日はあるの学校に行った。

例 (11a) の「l-madrasat-i」が指す意味を考えてみると、アラビア語では次の解釈が一般的である。話し手は、現在、学生であり、毎日学校に通っている状態にある。聞き手が(いるとすれば)、話し手に「(ma:ða: faʃalta lyawma?) 今日は何をしたの?」と質問し、話し手が(11a)のような答えをしたとしたら、話し手が発言した「al+名詞句」(l-madrasat-i)について、聞き手は「話し手が今通っている学校のことだ」と容易に判断することができる。(11b)、(11c)も同様の解釈をもたらす。(11b)では、例えば、父が子供に対して、(what did you do today?)と質問して、(today I went to school)というような返事をもたらすと、父は子供が行った学校が毎日通っている学校のことだとすぐに解釈することができる。(11c)も同じ状況で、毎日通っている学校に言及したい時は、「裸名詞」で指示するのが一般的である。

一方、(12a, b, c)は(11a, b, c)と異なる解釈をもたらす。(12a)で使用されている指示詞「tilka」を名詞の前に置くことによって、話し手は、普段とは異なる学校に聞き手の注目を引きたい、ということになる。

以上のことから考えると、「裸名詞」及び「あの+NP」による定性の性質の違いについて、次のような仮説を立てることができる。

仮説:

i) 「裸名詞」は、話し手にとっても聞き手にとっても脳の中に候補者が一つしか存在しないことを意味する。その候補者は、聞き手が容易に唯一的に同定することができる。時の経過と共に、登録から消えることもなく、他と混同することもない。過去に登録されていても、話し手の現在の状況との関わりがまだ続いているものに対して用いられる。(無標)

ii) 「あの+NP」は、話し手と聞き手の間の共通の経験や情報に基づくものではあるが、意味的に性質が類似している候補者がいくつかある中で、場面に応じて、一つに絞りたい場合に用いられる。「裸名詞」とは異なり、ある程度の努力をしなければ、

指示対象の唯一性または特定性の度合いが低くなる。過去に登録された一時的なエピソードとして同定される対象に用いられる。(有標)

3.3.2. 考察

本節では、上述の仮説を立証するために、いくつかの例文を考察していく。

(13 も 14 も娘がお母さんに授業について話している場面)

- (13) a. laqad uliyat **al-moha:darat-u** alyaum
 was cancelled DEF-class-NOM today
 b. 今日 は (φ) 授業 が キャンセル された。

- (14) a. laqad uliyat **tilka** **al-moha:darat-u** alyaum
 was cancelled that DEF-class-NOM today
 b. 今日 は **あの** 授業 が キャンセル された。

(13a, b) では、娘がお母さんに、毎日大学で受けている授業が今日キャンセルされたことを知らせている。「授業」を「裸名詞」で発言することによって、話し手も聞き手も指している授業は、毎日大学で受けている授業のことだという解釈になる。

一方、(14a, b) には、そのような解釈はない。例えば、娘が自分の専門と違う分野で、ある日特別な授業を受けるはずだった。そのことについて、前もってお母さんに知らせたとする。当日その授業に参加するつもりで大学に行ったが、キャンセルされたことが分かって、それをお母さんに知らせたとする。そうすると、「tilka」「あの」を名詞の前に置くことによって、「今日はいつもの授業ではなく、この間話した特別な授業がキャンセルされた」という意味になる。従って、お母さんの注目は、いつもの授業から、他の授業(娘に教えてもらった授業)に引きつけられることが期待される。すなわち、「あの+NP」は、聞き手の脳に対象を喚起させ、性質が類似している対象がいくつかある中で、話題に当てはまる特定の対象の方向に導く機能があると言える。

(15) A: きのう、買い物してたら、先生に会ったよ

B: へえ！先生も買い物してたの？

(16) A: きのう、買い物してたら、あの先生に会ったよ

B: あの先生って？

A: 先週ゲスト教師として来てくれた先生だよ

B: ああ、あの先生か

例 (15) で、話し手が言及した先生は、現在 A にも B にも関わりのある先生であり、学校でこの二人に教えている先生として認識されている。指示対象の同定スペースは、発話が進行中のスペースとなる。一方、(16) では、A が指示しようとしていた先生は、A も B も通っている学校で通常教えている先生ではなく、一時的にこの学校を訪れたことがある人物のことである。確かに、この人物は、A と B の間で共通の知識として脳内に登録されてはいるが、「あの+NP」は、通常の先生ではなく、他の共通の知識として登録されている人物を探す引き金になる。この場合には、指示対象の同定スペースは、現在ではなく過去にあるということになる。しかし、聞き手の知識の中で、話題の対象に当てはまる人物が何人もいて、特定の者を同定することができなかつたら、(16b) のような返事をすることもある。それは、「裸名詞」の場合には起きない混乱である。ここで、Halliday (1967) が提案した「復元可能性 (recoverability)」の概念が適用される。つまり、(16) の先生は、過去において A と B の間の共通知識として登録されてはいたが、登録された時からしばらく話題になっていないため、焦点から落ちてしまった。それからしばらく経過した後、再び談話に復元するために、過去の出来事を指す役割がある「あの」が用いられているのである。

(17) A: 去年、この時期に学校で火事があったんだよね！

B: もう一年経っちゃったの？あつという間だね。

例（17）では、事故の発生時と会話の時間軸が異なっているが、主題の「学校」は、話し手と聞き手との関わりが現在に至るまで継続的に続いているため、「裸名詞」で指示されている。

- （18） 子：お母さん、**あの仕事**やめてよかったね！毎日遅くて大変だったでしょう！
母：ホントよかったね。今の仕事はもっと余裕あるし！

（18）では、お母さんは以前ある仕事をしていたが、今はそれを辞めて他の仕事をしている状態にある。以前の仕事は、過去の一時的な出来事であり、現在まで継続していない。現在の仕事から過去の仕事へ視点を転換し、それへのアクセスを可能にするために、「あの+NP」が使用されている。つまり、指示対象の同定スペースは、現在ではなく、過去であるということになる。

以上の考察から考えると、日本語の「観念的照応」においては、「裸名詞」は、時間が経っても「主題の継続性」を表すのに対し、「あの+NP」は「主題の転換」を表す。「裸名詞」は、継続的なエピソードを指すのに用いられ、「あの+NP」は過去における局所的なエピソードを指すのに用いられる。「裸名詞」の場合は、発話が発せられるスペースが指示対象の同定スペースと同じものになるが、「あの+NP」の場合は、発話時より前の時空間が指示対象の同定スペースとなる。「裸名詞」は、その初登録が過去にあったとしても、現在でも関わりのあるものとして確認される対象を指すのに用いられるのに対し、「あの+NP」は、過去の経験の回復（recoverability）、過去の知識へのアクセスを可能にする役割があると結論付けられる。

4. 結び

本章では、「観念的照応」について考察した。「観念的照応」は、その指示対象を文脈外に持つので、これを「外界照応」の一つとして扱った。また、アラビア語との比較対照を通じて、日本語の「観念的照応」の機能を有する表現を明らかにした。それは「あの+NP」と「裸名詞」である。「あの+NP」には、場面の状況次第で、いくつかの用法があることは確かであるが、今回は話し手と聞き手の共通知識が原則で

ある「定性」を扱うことが目的だったため、話し手と聞き手の共通知識を条件とする「あの+NP」の用法を「裸名詞」と対照し考察を行った。データの分析を通して、双方とも話し手と聞き手の共通知識を表すことができるが、この知識に違いがあることが明らかになった。「裸名詞」は、過去において共有され、発話時点まで残っているような知識である。一方、「あの+NP」における知識は会話時点では既に終了しているものである。既に終了している出来事について、「あの+NP」を用いることによって、当該の出来事へのアクセスが可能になり、忘れられた情報が復元されることになる。

「裸名詞」、「あの+NP」のいずれも、話者同士の共通知識が必須であるため、これらの形式を日本語の「定性標示」と決定することができ、前者が無標、後者が有標の形式である。

第六章

「定性」と「限定性」の相違点及び結論

1. 概要

第三章から第五章にかけて、「限定名詞句」と「定名詞句」が異なる概念であることを提案し、この提案を踏まえて「文脈的照応」と「観念的照応」とを関連させ、それぞれの語用論的な性質を考察してきた。本章では、「文脈的照応」と「観念的照応」の意味機能を対照し、これらの相違点をまとめる。最後に、各章の概観及び結論をまとめる。

2. 「文脈的照応」と「観念的照応」の意味機能

2.1. 「文脈的照応」は指示的か、指定的か

ある名詞句が指示的か非指示的かという問題には多くの議論がある。西山（1985, 2000, 2003）では、指示的名詞句とは、「世界のなかのなんらかの対象を指示する」ものである。そのような機能を持たないものは非指示的名詞句と呼ばれると指摘している。梅木（2012）では、堤（2012）は形式意味論の枠組みに基づき、ある名詞句(a)が世界の対象物を直接指示するとき、その名詞句を指示的であるとしていると述べられている。更に、Donnellan（1966）によれば、指示的名詞句の位置に現れる確定記述句（definite description）には、「属性的用法（attributive use）」と「指示的用法（referential use）」という二つの語用論上の用法がある¹。

(1) 洋子を殺した奴は、精神異常者だ。

この例文で、「洋子を殺した奴」という記述は、実際に存在する人を指しているという意味で、指示的名詞句である。更に、発話されている状況・話し手の意図によって、指示的用法と属性的用法に分かれる。例えば、洋子殺しの疑いで裁判にかけられてい

¹ Donnellan による提案だが、西山（1985）の通りに引用した。

る被告人がいるとする。法定である二人の傍聴人がこの被告人について(1)を発言したとする。この場合は「洋子を殺した奴」という確定記述が、この被告人を指示しており、指示的用法で使用されているということになる。一方、洋子の父親が娘の洋子を殺した犯人は知らないが、「娘をこんな仕方で殺した奴は精神異常者だ」と主張しているとする。この場合は、洋子の父親が特定の人物を念頭において話しているわけではなく、このような残酷な行動をする者の属性について話しているという意味になる。従って、この場合は、この確定記述が属性的用法で使用されたということになる。属性的用法で使用されたとしても、指示的名詞句であることに変わりはない。

「文脈的照応」の機能を果たす「ソ・コ+NP」は、指示対象に当てはまるものとして世界の中の特定の物体を指示しない。この照応表現が表す意味は、前半の非限定的な名詞句の表す意味のみである。つまり、指示性が満たされていないため、「非指示的な限定名詞句」になる。

(2) 昨日橋から車が転落した。その車は家具を運んでいた。

庵(2002)は、指定指示の場合、「その」は先行詞へのテキスト的意味の付与という観点から捉えられていると述べ、井之上(2009)は、「指示連体詞+名詞」の名詞句全体が照応詞となる場合を指定指示(限定指示)というように述べている。更に、古賀(2004)は、「指定指示」とは、「その」によって無数にあるNの中から特定のものを指定し限定を加える用法であると述べている。例(2)からも明らかのように、後半の「その車」は、実際の車を指示しているのではなく、候補となる車を一つに限定している。すなわち、前半の非限定的な「車」のことである。この過程では、まず、聞き手の認識の中で車の候補者が限定され、次いで、その指示対象が文中で同定される。「車」に当てはまる対象がどこにあるのかという疑問に対して、「その」が聞き手の認識を前半の文に導き、そこから候補者を指定させる、というプロセスが行われる。つまり「その」には、指示対象の候補者を限定し、それに当てはまるものを文の前半で指定する機能がある。従って、「文脈的照応」の用法を持つ「限定名詞句(ソ・コ+NP)」には「指定的な機能があると判断することができる。

2.2. 「観念的照応」は指示的か、指定的か

前述したように、「文脈的照応」とは対照的に、「観念的照応」の指示対象は言語文脈から独立し、実世界から決定される。以下の例文を参照したい。

(3) A: 先週一緒に行った寿司屋さん、もう閉店だそうだよ。

B: へえ。あの寿司屋はおいしかったのに…

(第三章に掲載)

この例では、A と B が実際に一緒に行った店について話している。その店は二人の間の共通知識であるため、一つの対象に限定されていることは当たり前である。更に、「観念的照応」の指示対象は、文のレベルを超えて実世界から決定されるので、「文脈的照応」とは異なる機能を持つ。この例文では、実世界に存在する店がいくつかある中で、A と B の共通知識に当てはまる店を取り出し指示する機能を持つものが「あの」である。「現場指示」が目の前にある指示対象を指で指示するのと同様に、過去の経験や出来事をあたかも目の前にあるものとして指示するかのような機能を持つものが「あの」である。第六章で論考した「裸名詞」も実世界から指示対象を要求するものなので、「あの+NP」と同様の機能を持つ。従って、「観念的照応」の用法を持つ「定名詞句「あの+NP」と「裸名詞」」には「指示的^レな」機能があると判断することができる。

2.3. 「限定名詞句」と「定名詞句」の相違点のまとめ

本稿では、「限定名詞句」と「定名詞句」を異なる概念として区別し、それぞれの性質を様々な観点から見てきた。本節では、「限定名詞句」と「定名詞句」の相違点をまとめる。

- 「限定名詞句」と「定名詞句」の双方とも指示対象は「同定可能」であるが、それぞれの同定の過程が異なっている。「限定名詞句」の指示対象は、聞き手に知られていなくても、談話でもたらされる言語文脈情報によって、文中で限

定され同定される。一方、「定名詞句」の指示対象は、言語文脈情報に頼らず、文脈から独立し、実世界から談話の話題に当てはまる一つの対象を同定する。

- 「限定名詞句」と「定名詞句」の双方において、指示対象の「唯一性」(uniqueness)が共通条件となっている。しかし、「定名詞句」の場合は、「唯一性」に加えて「親密性」(familiarity)も必須である。「親密性」の条件が満たされていないならば、「定名詞句」の指示対象の同定は失敗する。一方、「限定名詞句」の場合は、「親密性」が一切関わらないという点で、「定名詞句」と異なる。「唯一性」の条件さえ満たされていれば、指示対象の同定が可能になる。

- 「限定名詞句」と「定名詞句」の意味機能はそれぞれ異なることが明らかになった。「限定名詞句」は、指示対象を文中で同定するという点で、「指定的な」機能を持つ。一方、「定名詞句」は、指示対象を実世界から同定するという点で、「指示的な」機能を持つ。

3. 結論及び今後の課題

3.1. 各章の概観

本稿を通して、「定性標示」を持たない日本語の定性の表し方を考察してきた。「定性」に関する研究は従来、定性標示を持つ言語では多くなされてきたが、定性標示を持たない言語ではそれほど重視されてこなかった。しかし、このような言語でも特定の定性標示がないとはいえ、「定性」が表せないわけではない。他の方法や言語表現などが「定性」の表し方に関わっていると考え、日本語の「定性」の表し方を追究することを本稿の目標にした。それを達成するために、定性標示を持つアラビア語を背景にして、それに対応する日本語の言語表現を考察した。まず第一章の前半では、アラビア語の定性体系を紹介した。アラビア語には、定性を表す方法が六つある。それらは、人称代名詞、指示代名詞、関係代名詞、固有名詞、定冠詞「al-」、付加構造(属格関係)であり、そのうち、定冠詞「al-」を本稿の考察対象にした。それから、第一章の後半では、日本語の定性に触れた先行研究をまとめた。

第二章では、考察対象となる日本語の指示詞、とりわけ「ソ」「ア」の性質と使い分けを考察した。まず、先行研究では、談話において、聞き手の話題に関する知識の有無は指示詞の選択に影響を及ぼさないと提案されたが、本稿では、「定性」を扱うため、聞き手の立場の重要性を主張しながら、指示詞の使い分けにおける聞き手の役割を考察した。その結果、「ア」系列指示詞は、話し手と話題になっている対象との関わりや結びつきが強いことを示す。また、相手を自分の世界に引き寄せて共感してもらいたい場合にも適用される。それに対し、情報量とは関係なく、指示対象と自分の関わりが弱いと感じ、認識の度合いが低いことを示したい時に、「ソ」系列指示詞が用いられるということが明らかになった。

第三章では、「定性」と深い関わりのある「同定可能性」という概念について考察した。「同定可能性」は「定性」の手掛かりであり、談話で発せられる指示対象を同定できなければ、「定性」は成り立たない。考察の結果、従来、言われてきた「定名詞句が同定可能な名詞句」「不定名詞句が同定不可能な名詞句」という対応は正確さを欠くという事実が明らかになった。指示対象の同定を可能にする情報は「言語文脈内」にも存在しており、「言語文脈外」のみに存在しているのではないということも明確になった。聞き手が指示対象を実世界の中から指定することができなくても、言語文脈上、指示対象を一つに限定できた時点で、「同定可能性」の条件は満たされたと言える。更に、「定名詞句」に加え、それと異なる性質を持つ「限定名詞句」というものを提案し、それぞれの性質の違いを詳細に考察した。その結果、冠詞が付いている名詞句を常に「限定名詞句」と呼び、機能上、発話時点より既知の情報を導入している名詞句を更に「定名詞句」と呼び、そうでない名詞句の場合は「限定名詞句」のままで呼び続けることとした。「定名詞句」と「限定名詞句」は、指示対象を認識する過程が異なっても、どちらも指示対象を同定することができる。ただし、「定名詞句」における指示対象の同定は、「既知性」とつながるのに対し、「限定名詞句」は、そういった同定のしかたではない。従って、「定名詞句」は「既知名詞句」と呼ばれることが多いため、「限定名詞句」と区別して扱うべきであると主張した。そこで、「限定名詞句」と「文脈的照応」、「定名詞句」と「観念的照応」とをそれ

ぞれ関連させ、第四章から第五章にかけて日本語の「限定辞」「定性標示」を考察した。

第四章では、「限定名詞句」が現れる「文脈的照応」を考察した。まず最初に、考察の背景になるアラビア語の定冠詞「al-」の用法を紹介した。アラビア語の先行研究では、「照応的な用法」と「総称的な用法」、そして、それらの下位分類のみが扱われているが、「al-」が統語的に定冠詞であるとしても、その用法は、「限定辞」と「定性標示」に分類すべきであるとした。それから、「文脈的照応」は「限定名詞句」の特徴であり、「定名詞句」の特徴ではないということが明らかになった。コーパスを分析した結果、「文脈的照応」において、「ソ」も「コ」も名詞句を限定する「限定辞」であると結論付けられた。

続いて第五章では、「定名詞句」が現れる「観念的照応」を考察した。アラビア語と日本語の例文を分析した結果、「観念的照応」として働くものは、「あの+NP」に加え、「裸名詞」もあるということが明らかになった。「裸名詞」も「あの+NP」も話し手と聞き手の間の共通の知識を表すのに用いられるが、この共通知識の性質が異なるということが分かった。「裸名詞」は、「主題の継続性」を表すのに対し、「あの+NP」は「主題の転換」を表す。「裸名詞」は、継続的なエピソードを指すのに対し、「あの+NP」は過去における局所的なエピソードを指す。「裸名詞」の場合は、発話が発せられるスペースが指示対象の同定スペースと同じものになるが、「あの+NP」の場合は、発話時より前の時空間が指示対象の同定スペースとなる。「裸名詞」は、その登録が過去にあったとしても、現在まで話し手と聞き手の間にその関わりが継続しているという性質を持つ。一方、「あの+NP」は、その登録が過去に起きて、過去で終わってしまうという性質を持つ。過去に登録された情報を復元させるものは「あの+NP」である。

第六章の前半では、「定名詞句」は「限定名詞句」と異なる性質を持つという主張を支えるために、本稿を通して明らかになった双方の性質の相違点をまとめた。第一に、「限定名詞句」の同定は文中で決まるのに対し、「定名詞句」の同定は実世界で

決まる。第二に、「限定名詞句」の指示対象の同定は、「唯一性」のみに関わるのに対し、「定名詞句」の指示対象の同定は、「唯一性」に加え「親密性」にも関わる。第三に、「限定名詞句」は、指示対象を文中で指定する「指定的な」機能を持つのに対し、「定名詞句」は指示対象を実世界から指示する「指示的な」機能を持つ。

3.2. まとめと今後の課題

以上で各章の内容を概観した。日本語を例にした本稿を通して、冠詞を持たない言語でも、「定性」は何らかの方法で表されるということが明らかになった。日本語では、指示詞と裸名詞が「定性」を表す方法の一つであり、「コ」「ソ」が「限定辞」として機能し、「ア」と「裸名詞」が「定性標示」として機能すると結論付けることができる。

本稿では、「文脈的照応」における「コ」「ソ」の使い分けは考察の焦点ではなかったため、「主語＋現在」という統語的な組み合わせが、指示詞の選択に決定的であるか否かということを立てることができなかった。しかし、データの分析結果は興味深いものなので、今後の課題にして、この組み合わせが指示詞の選択に関わっているかどうかということを追究したい。また、第二章でも明らかになったように、「非限定的な定名詞句」も「限定的な不定名詞句」も文脈によって同定可能になり得ることだが、何をもって「同定可能性」が決まるのかということについて、曖昧さを取り除いた分析を今後の課題にしたい。

指示詞「ソ」「ア」の調査

性別： 年齢： 所属： 国籍：

- (1) 昨日神田で火事があった。新聞によると、（その／あの）火事で二人が死んだそう
うだ。
- (2) （二人が実際の火災現場は見えていないが、A がニュースで聞いて、B が近くを通
っていただけで、実際の風景は見えていないとする）
A: 昨日神田で火事があった。（その／あの）火事で二人が死んだ。
B: そうか。私も近くを通っていたら、10 台もの消防車が現場に急行していたか
ら、（そこ／あそこ）が全焼しているかと思った。
- (3) A: あのね、前話した「仁」のドラマだけど、先週の話ってすごく面白かった
よ！！
B: へえ～、私も一回見てみたい！！聞いたことあるけど、まだ見てない。（それ
／あれ）って何曜日放送なの？
- (4) A: 今年の春休みは満 3 ヶ月だそうだ。
B: うん、聞いた聞いた。（それ／あれ）はすごいね！！旅行をちゃんと計画しよ
う。
- (5) （二人が海外にいるが、日本の地震について話している。二人とも地震について
の情報レベルは同じだとする）
A: （その／あの）地震は本当に恐ろしい災禍だった。友人が二人津波で流された。
B: それは気の毒ね！！私の親戚の自宅も（その／あの）津波で流された。今、避
難所にいる。

(6) (二人が東京スカイツリーについて話している。実際にまだ見ていなくて、テレビでしか見ていないとする)

A: ねえねえ、今朝、東京スカイツリーがテレビで映ってたよ！

B: うん、見た見た。(それ／あれ) ってすごいよね！高さ何メートルあるって？上ってみたい。

コーパス 1

? 他方のほうが自然・容認度が高い

△ 他方のほうが使いやすい

* 不自然

I 主語＋過去

(1) waqafat fi larjinti:n **ha:diθat-un** bashiʕatun; haiθu isʕtʕadama qitʕa:run birasʕi:fi lmaħatʕati. wa qad tuwufiya fi l-**ha:diθati** ma: yaqrubu min arbaʕi:na shaxsʕan wa usʕi:ba akθaru min subʕumaʕatin a: xaru:n.

アルゼンチンで、電車がホームに突っ込む悲惨な事故が起きた。{この事故／△その事故}で、40人ぐらい死亡し、700人が怪我をした。

(2) habbat bilʕamsi **ri:h-un** ʕasʕifatun ʕala muħa:faðʕati lqa:hira, fa addat l-**ri:hū** ila iqtılaʕi alʕadi:du min al-ashja:ri.

きのうカイロで強い風が吹いた。{この風／その風}でたくさんの木が倒れた。

(3) sha:hada **rajul-un** jari:mata sariqatan taħduθu ama:mahu fi lsha:riʕi, faqa:ma l-**rajulu** bimumʕa:radati l-lisʕsʕa θumma sallamahu lil-shurtʕati.

ある男が目の前でひったくりを目撃した。{*この男／その男}はひったくりを追いかけて交番に突き出した。

(4) fi muðʕa:harati lamsi ħadaθat **musha:ħana:t-un** baina laħza:bi lsiya:siyyati yaira anna l-**musha:ħana:ta** intaħat du:na tatʕawwori lmawqifi.

昨日のデモで、政党の間に争いが起きた。しかし、{△この争い／その争い}は悪化せずに終わった。

(5) saqatʕat bilʕamsi **sayyarat-un** min fawqa al-kubri:. ka:nat **as-sayyaratu** muħamalatan biʕaθa:θin manziliyin.

昨日橋から車が転落した。{△この車／その車}は家具を運んでいた。

(6) sha:raka **mutasa:biqu:n** min muxtalafi ljinsiyya:ti fi musa:baqati t^f-t^bxi allati uqi:mat fi turkiya. tanawwaft jinsiyya:tu **l-mutasabiqi:n** baina urupiyi:n wa farabin wa asyawiyi:n.

トルコで行われた料理大会には、たくさんの国々から参加者が集まった。{*この参加者/その参加者}の出身はヨーロッパ、アラブ、アジアなどでした。

(7) daxala **t^f-a:lib-un** maktaba usta:di lkimya:ʔi ʔumma xaraja mutajahhiman. laqad rasaba **t^f-t^f-a:libu** fi limtiha:ni.

ある学生が化学の先生の部屋に入り、不機嫌に部屋を出てきた。{?この学生/その学生}は試験に失敗したのだった。

II 主語+現在

(8) yaʔti: ila maharaja:ni 'kan' **mumaʔʔilu:na** min jami:ʔi lbila:di, wa yuʔtabar min ahammi taqali:di ha:ða lmahraja:n-i muru:r **l-mumaʔʔili:na** fawqa lbusa:t^fa lahmara qabla d-duxu:li ila mabna lmahraja:ni.

カンヌ映画祭には、世界中から多くの俳優がやってくる。{これらの俳優/△それらの俳優}が言うには、赤い絨毯の上を歩くことは、伝統的な行事となっている。

(9) fi at^f-t^fari:qi baina madi:natai yirna:t^fa wa almeriyya fi aspanya tu:jadu **t^f-awa:hi:nu** hawa:ʔin baida:ʔun kabi:ratun. tustaxdam **at^f-t^f-awa:hi:nu** litawli:di lkahraba:ʔi.

スペインのグラナダとメリアの間を走る道路には、大きくて白い風車がいくつもある。

{*これらの風車/それらの風車}は発電に使われる。

(10) fi fas^sli lxari:fi fi mis^sra tahubbu **riya:h-un** munʔishatun tulat^tʔifu min hara:rati s^ss^saifi. taʔti: **l-riya:h-u** ʔa:datan min aljihati sh-shamaliyyati lyarbiyyati.

エジプトでは秋に夏の暑さを緩める涼しい風が吹きます。{この風/?その風}はたいてい北西の方向から来ます。

(11) yaʔti: **fanna:nu:n** min muxtalaf-i anḥa:ʔi lʕa:lami ila misʕra lihudu:ri maharaja:ni lqa:hirati lsinima:ʔiyi d-duwaliyi. wa yantahizu **l-fannanu:n** lfursʕata lil-istimta:ʕi bimaʕa:limi misʕra s-siya:ḥiyyati.

カイロの国際映画祭に参加するため、世界各国から多くの芸能人がエジプトにやってくる。{これらの芸能人たち／?それらの芸能人たち}は、その機会を活かし、エジプト観光も楽しんでいる。

III 主語+未来

(12) satahubbu **riya:h-un** ʕa:sʕifatun ʕala lmintʕaqati sh-shamaliyyati yadan, fayajibu tawaxxi: lḥaḍari min surʕati **l-riya:ḥi** aḥna:ʔa lqiya:dati.

明日、強い北風が吹くでしょう。車を運転する人は{*この北風に／*その北風に}注意する必要がある。

(13) sataqu:mu **lajnat-un** handasiyyatun yadan bimufa:yanati lmajmaʕi lʕilmiiyi fi lqa:hirati min ajli taḥdi:di mawʕidi tarmi:mihi. tatakawwanu **llajnatu** min muhandisi:n istisha:riyyi:n ḍawi xibratin ʕa:liyatin.

明日カイロでは、エンジニアリング委員会が修復作業の開始を決定するのに、アカデミーを訪れていく。{この委員会／△その委員会}は長い経験を持つコンサルタント・エンジニアから成っている。

(14) yadan sayasʕduru **ʕadad-an** jadi:dan min majallati ‘a:xir sa:ʕa’. Sayatamayyazu **l-ʕadadu** bitanawuʕi mawdʕu:ʕa:tihi baina ḥaqa:fiyyatin wa insa:niyyatin wa kawniyyatin wa yiḍa:ʔiyyatin.

明日アーヒル・サーアー誌の新号が発行される。{*この号／その号}は、文化的、人間的、宇宙的な分野を扱うことが特徴的だ。

(15) sayaqu:mu yadan **tʕulla:b-un** kaḥi:ru:n bihamlatin lijamʕi tabarruʕa:tin lish-shaʕbi s-su:riyyi. sayatajammaʕu **tʕ-tʕulla:bu** fi s-sa:ʕati ḥḥa:minati sʕaba:han ama:ma maqarri lja:mifati.

明日多くの学生がシリア国民のために寄付を集めるキャンペーンを実施する。{?これらの学生/それらの学生}は、午前8時に構内で集まる。

IV 目的語+過去

(16) hi:nama: ka:na rija:lu lmat'a:fi?i yabðilu:na qas'a:ra: jahdihim li?it'fa:?i lhari:qi, ra?aitu **rajul-an** yas'fadu lbina:yata lmuqa:bilata fa-rtabtu an yaku:na **li-r-rajuli** yadun fi ða:lika lamri.

消防士が懸命に消火活動をしている時、向こうの建物を上る男を見かけた。{*この男/その男}は、放火に関係があるか疑われていた。

(17) zarafa muhamadu **shajarat-an** fi hadi:qati manzilihi fa-ka:nat **ash-shajaratu** bimaθa:batu shajarata lhaz' bilnisbati lilhadi:qati.

ムハンマドは自分の家の庭で木を植えた。{*この木/その木}は、庭に良い運をもたらした。

(18) ka:nat lmadarisu tuqaddimu fi assa:biqi **t'afa:m-an** yaira s'ihhiyin lit't'ulla:bi mali:ʔan bilshuhu:mi wa lmawa:di lha:fiz'ati, fa-aws'at lajnatu sh-shu?u:ni s'ihhiyati bitayyi:ri **t't'afa:mi**.

学校は以前生徒たちに脂肪や保存料がたくさん入っている不健康な給食を提供していた。そのため、学校の健康委員会が{*この給食/その給食}を変えることを求めた。

(19) wajadat s'adi:qati: ða:ta yawmin **qit't'-an** musharradan, faz'allat taštani: **bil-qit't'i** hatta as'baha bimaθa:batu fardun min afra:di lfa:ʔilati.

私の友達はある日、野郎猫を見つけた。彼女は{△この猫/その猫}の面倒を見て、猫は家族の一員ようになった。

(20) mundu waqtin qas'i:rin tawas's'ala lmas?ulu:n ʔan muthafi alpra:do sh-shahi:ri fi espania ila **kashf-in** ha:ʔilin fi qabwi lmuthafi, yatamaθθalu **l-kashfu** fi taw?ami lawhati 'l-Gioconda' lir-rassa:mi lfa:lami Leonardo Da Vinci.

最近、スペインの有名な美術館であるプラドの地下室では、担当者がすばらしい発見をした。{ *この発見 / その発見 } とは、レオナルド・ダ・ヴィンチが描いたモナリザの双子の絵画だ。

(21) hi:nama ka:nat assafi:natu tayraqu ra?a: aḥadu lmusa:firi:na **lawḥ-an** yatʿfu: ʕala satʿhi lma:ʔi, fazʿalla rrajulu mutaʕaliqan **bil-lawḥi** hatta wasʿalat tʿa:ʔira:tu nnajati.

船が沈む時、ある客が、一枚の板が浮いているのを見つけた。この客は、救助の飛行機が来るまで、{ *この板 / その板 } に掴まっていた。

(22) ʔumma jaʕal-na:hu **nutʿfat-an** fi qara:rin maki:n, ʔumma xalaqna **l-nutʿfata ʕalaqat-an** faxalaqna **l-ʕalaqata mudʿyatan** faxalaqna **l-mudʿyata ʕizʿa:m-an** fakasawna **l-ʕizʿa:ma** laḥman ʔumma ansha?na:hu xalqan a:xara fataba:raka lla:hu aḥsana lxa:liqi:n. (Qura:n surat: Almuʔminu:n [23:14])

次に、われはかれを精液の一滴として堅固な住みかに収めた。それからわれは、{ *この精液 / その精液 } を一つの血の塊に創り、次に { *この塊 / その塊 } から肉塊を創り、次いで { *この肉塊 / その肉塊 } から骨を創り、次に肉で { *この骨 / その骨 } を覆い、それからかれを外の生命体に創り上げた。ああ、なんとすばらしいアッラー、最も優れた創造者であられる。(訳も引用)

(23) ra?aitu fi alʕa:mi lma:dʕi: **sirb-an** mina tʕ-tʕuyu:ri lmuḥa:jirati fi riḥlatiha mina sh-shama:li ila aljanu:bi. wa ka:na **as-sirbu** yatara:qasʕu yami:nan wa shima:lan fi mandʕarin jami:lin.

去年北から南へ移動している渡り鳥の群れを見た。{ *この群れ / その群れ } は美しく左右に舞っていた。

(24) qaddama laha: wa:liduha: **nasʿi:ḥat-an** falam ta?xuð **bin-nasʿi:ḥati** wa la:kinnaha nadimat fi niha:yati lamri.

彼女のお父さんは忠告をしてくれたが、彼女は { △この忠告 / その忠告 } を入れなかった。しかし結局、彼女は後悔した。

(25) bana: alfara:ʕinatu **ahra:ma:t-in** ʕazʕi:matin. ashharu **l-ahra:ma:ti** hiya xu:fu: wa xafraʕ wa manqaraʕ alka:ʕinu:na bi-muħa:fazʕati lji:zati.

古代エジプトのファラオは巨大なピラミッドを建築した。{これらのピラミッド/それらのピラミッド}で最も有名なのは、ギザの三大ピラミッドであるクフ王、カフラー王、メンカウラー王のものだ。

(26) ishtara: muhammadu **kita:b-an** wa huwa fi tʕari:qihi ila maħatʕʕati lqitʕa:ri. faka:na **l-kita:bu** xaira rafi:qan lahu fi riħtatihi atʕ-tʕawi:lati.

駅へ行く途中でムハンマドは本を買った。{この本/その本}は、長い旅の友となった。

(27) talaqqaina: l-yawma **dars-an** fi l-luyat-i l-ʕarabiyat-i. faka:na **d-darsu** mufta:h-an li-qawa:ʕid-i l-luyat-i.

今日アラビア語の授業を受けた。{この授業/*その授業}は文法理解の助けになった。

(28) ishtaraitu lyawma **ħaqi:bat-an** jadi:datan. wa laakinnani: iktashaftu anna **l-ħaqi:bata** sʕay:ratun laa tasaʕ kulla ayra:dʕi:.

今日新しいかばんを買った。しかし使ってみると、{このかばん/*そのかばん}は小さくて、財布が入りきらない大きさだった。

(29) alqa: al-majlisu lʕaskariyyu **baya:n-an** ha:mman bilʕamsi. sʕarraħa fi **l-baya:ni** anna intixa:ba:ta rriʕa:sati satatimmu fi niħa:yati shahri yunyu: al-qa:dim.

昨日軍事会議が重要な発表をした。{この発表/?その発表}によると、大統領選挙は6月下旬に行われるとのことだ。

V 目的語+現在

(30) yaqu:mu sh-shaʕbu alaspā:niyu **bi-muzʕa:hara:t-in** ʕadidatin ha:ðihi al-aya:mi bisababi siya:sati t-taqashshufi allati: aʕlanat ʕanha: alħuku:matu. yaira anna **l-muzʕa:hara:ta** lam taʕt biħima:riħa: ħatta ala:na.

政府が節制政策を発表したため、スペインの国民たちは様々なデモを起こしている。
しかし、{これらのデモ/それらのデモ}はまだ実っていない。

(31) ʕinda ðiha:bi: ila lmadrasati kulla yawmin ara: **kalb-an** dʕaxman. iktashaftu
baʕda fatratin min alwaqti anna **l-kalba** milkan lijiddi:.

毎日学校へ行く途中で大きな犬が見えます。後に、{この犬/その犬}は祖父のペ
ットだと分かった。

(32) yusallimu tʕ-tʕulla:bu **taqri:r-an** sanawiyyan lilja:miʕati. yatadʕammanu t-
taqri:ru inja:za:ta lʕa:mi lma:dʕiyi fi maja:li lbaħθi lʕilmiiyi.

学生は毎年大学にレポートを提出しなければならない。{*このレポート/そのレポ
ート}には、前年度の業績を含む。

VI 目的語+未来

(33) saʔusha:hidu yadan **film-an** rumansiyyan fi s-sinema. **al-filmu** yadu:ru hawla
qisʕsʕati hubbin aflatʕu:niyyatin baina sha:bbin wa fata:tin.

明日映画館へ映画を見に行く。{?この映画/その映画}は、ある男女の精神的恋愛
について語っている。

(34) sayulqi: arraʔi:su lmuntaxabu **xitʕa:b-an** haamman fi assa:ʕati θθa:liθati
ʕasʕran. ha:ða: wa yuʕtabaru **l-xitʕa:bu** huwa alxitʕa:bu rrasmiyyu alawalu lirraʔi:si
mundu tawalli:hi arriʔa:sati.

今日午後 3 時に選出された大統領が声明を出します。{△この声明/その声明}が、
大統領選出後、初の正式的なものとなります。

VII 前置詞句+過去

(35) nazalat amtʕa:run yaʔi:ratun famtalaʔat alhada:ʔiqu **bi-zuhu:r-in** ra:ʔiʕatin.
tamayyazatu **z-zuhu:ru** bira:ʔihatihā: alʕaðbati.

大雨が降ったので公園が美しい花でいっぱいになった。{*この花/その花}はやさ
しい香りが印象的だった。

(36) wasʕala rraḥa:latu ila **mintʕaqat-in** na:ʔiyatin. ka:nat **al-mintʕaqatu** yamurru biha: nahrun fi ssa:biqi wa la:kinnahu jaffa bisababi qillati suqu:ti lamtʕa:ri.

冒険家が遠く離れた地に辿り着いた。{*ここ/そこ}には昔、川が流れていたが、雨が少なかったので、{*この川/その川}が干上がってしまった。

(37) ḍahababtu maṣa afra:du ʕa:ʔilati: fi ʕutʕlati niha:yati lisbu:ʕi ila **ḥadi:qat-in** sʕayi:ratin bilqurbi min manzilna:. ka:nat **al-ḥadi:qatu** tamtaliʔu bimuxtalafi anwa:ʕi zzuhu:ri.

週末に家族と一緒に家の近くにある公園に行った。{*この公園/その公園}にはたくさんのお花が咲いていた。

(38) ʕa:dat shaqi:qati: min **ija:zat-in** tʕawi:latin. kaanat qad qadʕat **al-ija:zata** fi aliskandariyyati.

姉が長い休みから帰ってきた。姉は{*この休み/*その休み}をアレキサンドリアで過ごしていた。

VIII 前置詞句+現在

(39) aḍhabu maṣa afra:du ʕa:ʔilati: fi ʕutʕlati niha:yati lisbu:ʕi ila **ḥadi:qat-in** sʕayi:ratin bilqurbi min manzilna:. tamtaliʔu **l-ḥadi:qatu** bimuxtalafi anwa:ʕi zzuhu:ri.

週末にはいつも家族と一緒に家の近くにある公園に行く。{*この公園/その公園}にはたくさんのお花が咲いている。

IX 前置詞句+未来

(40) sanaḍhabu ḡadan fi **riḥlat-in** baḥariyatin maṣa asʕdiqa:ʔina:. **ar-riḥlatu** sataqu:mu fi assa:ʕati θθa:minati sʕaba:han.

明日、友達とクルージング旅に行く。{*この旅行/その旅行}は午前 8 時に出発する。

コーパス 2 (複数形)

(1) **tajamhara t'ullab-un** ama'ma maqarri lja:miṣati bilamsi. Wa tṣa:laba t'ullabu biḥistiqa:lati raḥisi lja:miṣati.

昨日大学の前で多くの学生が集合した。{これらの/*それらの} 学生は学長に辞職することを求めた。

(2) **hallaqat t'uyu:r-un** kaḥi:ratun fawqa manzili libidṣati daqa:ḥiqin. thumma intḥalaqat **at-t'uyu:ru** baṣda ḍalika ila masa:riha min jadi:din.

たくさんの鳥が数分家の周りを旋回した。その後、{△これらの/それらの} 鳥はまた飛んで行った。

(3) raḥaitu **at'fa:l-an** yalṣabu:na lkurata fi sh-sha:riṣi. fanabbahtu **l-at'fa:la** ṣala xutḥu:rati ha:ḍa lfifli.

道路でボール遊びをしている子供たちを見た。いかに危険なのかということ（{△これらの/*それの} 子供たちに）注意した。

(4) tatafattah **zuhu:r-un** kaḥi:ratun fi fasḥli rrabi:ṣi. wa tuṣaddu zahratu ashja:ri lkarzi min ashhari **z-zuhu:ri** fi l-ya:ba:ni.

春にはたくさんの花が咲く。{*これら/それら} の花の内、桜が日本で最も有名な花だ。

(5) nashaabat **hara:ḥiq-un** kaḥi:ratun fi Misṣra muḥaxaran. Wa laṣalla min axtḥari **l-hara:ḥiqi** hari:qu lmajmaṣi lṣilmiyyi wa hari:qu maxa:zini lbitru:li.

最近エジプトでたくさんの火災が起きた。{これらの/*それらの} 火災の中で、アカデミーやガソリン倉庫のものが最もひどいものだった。

(6) tahaddaḥtu ila **t'ullab-in** min muxtalafi fiḥa:ti lṣumri ṣan raḥyihim fi ḥawrati Misṣra. wa qad ajmaṣa **t-t'ullabu** ṣala anna ḥḥawrata lam tajn ḥima:raha: baṣd.

様々な年齢の学生たちにエジプトの革命について意見を聞いた。 {これらの/*それらの} 学生たちは皆エジプトの革命はまだ実っていないと意見がそろっていた。

(7) tuhalliqu t'uyu:r-un kaθi:ratun hawla lkafbati lmuqaddasati. wa la:kinna t'uyu:ra la: tastat'if alt'ayara:na fawqa lkafbati.

カーバ神殿の周りをたくさんの鳥が旋回している。しかし、 {これらの/それらの} 鳥はカーバの上を渡れない。

(8) tuqaddimu bara:miju lakli fi altilfa:zi at'ba:q-an laθi:ðatan min muxtalafi lbila:di. wa ta'kisu l-at'ba:qu alkaθi:ra min θaqa:fa:ti bila:diha:.

テレビの料理番組では世界中のおいしいレシピが紹介される。 {これらの/*それらの} レシピはそれらの国の文化を反映している。

→ テレビの料理番組では世界中のおいしいレシピが紹介される。 {これらの/それらの} レシピは国の文化を反映している。

(9) ya'rid'u altilfa:zu lya:ba:niyyu bara:mij-a ṣadi:datan. Taxtalifu l-bara:miju ma:baina θaqa:fiyyatin wa t'ibbiyyatin wa fanniyyatin wa musa:bawa:tin wa ma yaira ḍa:lika.

日本のテレビは多様な番組を放送する。 {*これらの/それらの} 番組には、文化的、医療的、芸術的、クイズのものなどがある。

(10) tat'rahu lja:miṣatu mumayiza:t-an jadi:datan lilt'ulla:bi almultahiqi:na biha. ihda l-mumayiza:ti hiya altaba:dul at't'ulla:bi: maṣ ja:miṣa:tin ajnabiyyatin.

大学は所属する学生に様々な特典を提供する。 {*これらの/それらの} 特典の一つに、海外の大学との交換留学プログラムがある。

(11) yut'a:libu sh-shaṣbu lmis'riyyu bitayyi:ra:tin kaθi:ratin. tatamaθθalu l-tayyi:ra:tu fi tayyi:ra:tin siya:siyyatin wa iqtis'a:diyyatin wa ta'fli:miyyatin ila yairi ḍalika.

エジプトの国民たちはあらゆる分野で改変を求めている。{これらの/*それらの}
改変は、政治的、経済的、教育的なものなどを含む。

(12) qa:ma **musallaḥ-u:n** bimuda:hamati lbanki wa sirqati mablayan kabi:ran
minhu. wa la:kinna ash-shurtʿata istatʿa:ʿat alqabdʿa ʿala **al-musallaḥi:n** wa
istaraddat almablāya lmasru:qa minhū.

武装強盗が銀行に押し入って、多額の金を盗んで逃げた。しかし、警察官が {△これ
らの/それらの} 武装強盗を逮捕し、盗まれた金額を取り返した。

(13) qa:ma **mutazʿa:hir-u:n** birashqi sh-shurtʿati bilhija:rati. faraddat ash-
shurtʿatu ʿala l-**mutazʿa:hiri:n** birashqihim bilmiya:hi.

デモ参加者が警察官に石を投げつけた。警察官は {△これらの/それらの} デモ参加
者に放水で対抗した。

謝辞

本論文をまとめるにあたり、終始暖かい励ましとご指導をいただいた、名古屋大学大学院文学研究科教授 **佐久間淳一先生**に心より感謝申し上げます。筆者は家庭の事情で名古屋大学から離れ、札幌に引っ越すことになったため、佐久間先生とはメール交換をする以外、他のご連絡方法がありませんでした。しかし、佐久間先生はいくらお忙しくても、いつもとても御丁寧に対応してくださり、研究を進めるためにご助言やご説明などをいつも素早くご返信くださいました。また、毎月名古屋に行き、研究の進展を報告し、ご指導をいただくにあたり、ご多忙中でもいつもお時間を作っていただき、ご都合を合わせていただきました。佐久間先生の一貫したご支持、激励、ご指導なくしては、本論文の実現は不可能でした。家庭の事情をご理解してくださり、ここまでともに歩んでくださった佐久間先生に改めて心から感謝申し上げます。

名古屋大学大学院文学研究科教授 **町田健先生**には、数多くのご助言とご協力をいただいたことに心より感謝申し上げます。

本論文を執筆するにあたり、生活の面でも精神的な面でも様々な困難や戸惑いがありましたが、いつもこの状態から助けてくださり、精神的にも支持して励ましてくださり、話を聞いてご助言くださった、名古屋大学留学生センター教授 **田中京子先生**に心から感謝申し上げます。

本論文の執筆にあたり、名古屋大学大学院文学研究科チューターの **岩月真也様**に熱心なご協力と数多くの貴重なご助言をいただいたことに心より感謝申し上げます。

それから、名古屋言語研究会の先生方、研究者の方々、学生の皆様の数多くのご助言や貴重な討論に心より感謝申し上げます。

同研究科修了生の **汪宇様**の引っ越し後の支持や励ましや援助、同級生である **久保田一充様**のご助言や援助に心より感謝申し上げます。

また、引っ越し先の北海道大学留学生センター教授 **山下好孝先生**にも大変お世話になりました。山下先生にご意見をいただいた他、研究を進めるために必要な資料を提供していただき、とても親切にご協力をいただいたことに、心より感謝申し上げます。

それから、本論文を始めるにあたり、アラビア語の部分に必要なアラビア語の資料を提供して下さった、アインシャムス大学アラビア語学科教授 ナイーム・アミー
ン及び教授 ホダ・ワスフィーに心より感謝申し上げます。先生方の手助けやご協力
なくしては、アラビア語の部分は完成できませんでした。

最後に、博士課程後期課程に進学して以来、常に笑顔で支持してくださり、論文を
実現するまで力の源になってくれた家族（父、母、主人、息子、二人の姉）の皆様に
心より感謝申し上げます。それから、母国の大学アインシャムス大学にも心より感謝
申し上げます。

参考文献

1. 庵功雄（1994）「定性に関する一考察：定情報という概念について」『現代日本語研究』1巻、pp. 40-56
2. 庵功雄（1999）「ア系統指示詞の用法に関する一考察」『現代日本語研究』6巻、pp. 100-114
3. 庵功雄（2002）「「この」と「その」の文脈指示的用法再考」『一橋大学留学生センター紀要』5巻、pp. 5-16
4. 池内正幸（1985）『名詞句の限定表現』大修館書店
5. 井之上直也、飯田龍、乾健太郎、松本裕治（2009）「指定指示・代行指示を区別した指示連体詞の照応分析」『言語処理学会第15回年次大会発表論文集』、pp. 372-375
6. 今西典子・浅野一郎（1990）『照応と削除』大修館書店
7. 梅木俊輔（2012）「指定指示「この」における談話上の特徴—「その」との対比から—」『第10回日本語教育研究集会予稿集』、pp. 14-17
8. 金水敏（1988）「日本語における心的空間と名詞句の指示について」『女子大文学. 国文篇：大阪女子大学紀要』39号、pp. 1-24
9. 金水敏・田窪行則（2004）「日本語指示詞研究史から／へ」『日本語研究資料集第1期第7巻 指示詞』ひつじ書房、pp. 151-192
10. 金水敏・田窪行則（2004）「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『日本語研究資料集第1期第7巻 指示詞』ひつじ書房、pp.123-149
11. 久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店
12. 古賀美千留（2004）「文脈指示の「そのN」について—「それ」との置き換え可能性から—」『日本語教育連絡会議論文集』16巻、pp. 35-39
13. 国立国語研究所（1981）『日本語の指示詞』大蔵省印刷局
14. 佐久間鼎（1983）『現代日本語の表現と語法』くろしお出版
15. 柴谷温子（1998）「アラビア語における限定・非限定の意味と機能」東京外国語大学大学院地球文化研究科博士論文

16. 榮谷温子 (1998) 「アラビア語の限定名詞句の用法：主に童話のテキストの書き出し部分について」『日本中東学会年報』第 13 号、pp. 257-285
17. 田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3 巻 3 号、pp. 59-74
18. 東郷雄二 (1994) 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』1 巻、pp. 27-46
19. 東郷雄二 (1999) 「談話モデルと指示—談話における指示対象の確立と同定をめぐって—」『京都大学総合人間学部紀要』第 6 巻、pp. 35-46
20. 東郷雄二 (2000) 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』第 7 巻、pp. 27-46
22. 東郷雄二 (2001) 「定名詞句の指示と対象同定のメカニズム」『フランス語学研究』第 35 号、pp. 1-14
23. 新妻仁一 (2005) 『アラビア語文法ハンドブック』白水社
24. 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房
25. 丹羽哲也 (2004) 「名詞句の定・不定と存否の題目語」『国語学』第 55 巻 2 号、pp. 1-15
26. 福島祥行 (2004) 「冠詞・指示・知識—相互知識のパラドクスと相互行為—」『森本英夫先生古希記念『周辺』『TLLMF』合併号』シメール社、pp. 61-74
27. 古川直世 (1981) 「不定名詞句における特定性の概念について」『文芸言語研究言語篇』(筑波大学文芸・言語学系) 第 6 巻、pp. 85-101
28. 山梨正明 (1992) 『推論と照応』くろしお出版
29. 吉田悦子 (2005) 「談話理解モデルからみた日本語名詞句の解釈について」『人文論業：三重大学人文学部文化科学研究紀要』22 巻、pp. 129-140
30. 李長波 (1994) 「指示詞の機能と「コ・ソ・ア」の選択関係について」『京都大学文学部国語学国文学研究室』63 巻 5 号、pp. 37-54
31. Abdulatif, M. H., A. M. Omar, M. A. Zahran (1997), *Alnahw Alasasi*, Dar Alfikr Al'arabi Publisher

32. Afifi, Ahmed (1992), *Alta'rif Waltankir fi Alnahwi Al'arabi*, Dar Alhani Publisher
33. Alsaiyouti, Alimamu Jalal Eldin Abdul Rahman Ibn Abi Bakr (1998), *Ham'i Alhawami' fi Sharhi Jam'i Aljawami'*, Dar Alkutub Al'ilmiiyya Publisher
34. Alwazir, Mohamed Ragab Tolba, Naim Amin, Yahia Khairiya (2002), *Mohaḍarat fi Binaai Aljumla Alismiyya*, Dar Alittiḥad Publisher
35. Chafe, Wallace L. (1970), *Meaning and the Structure of Language*, The University of Chicago Press
36. Chafe, Wallace L. (1976), *Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics, and Point of view*, In *Subject and Topic*, Charles N. Li (ed.), Academic Press, pp. 25-55
37. Chesterman, Andrew (1991), *On Definiteness: a study with special reference to English and Finnish*, Cambridge University Press.
38. Dik, Simon C. (1981), *Functional Grammar*, Foris: Dordrecht / Cinnaminson
39. Givon, T. (1983), *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-Language Study*, John Benjamins
40. Halliday, M. A. K. & Hasan Ruqaiya (1976), *Cohesion in English*, Longman
41. Hassan, Abbas (1974), *Alnahw Alwafi*, Dar Alma'arif Publisher
42. Hawkins, John A. (1978), *Definiteness and Indefiniteness*, Croom Helm: Atlantic highlands, N.J.
43. Heine, Julia E. (1998), Definiteness Predictions for Japanese Noun Phrases, *Annual Meeting of the ACL. Proceedings of the 36th Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics and 17th International Conference on Computaional Linguistics*, Vol. 1, pp. 519-525
44. Jumua, Hussein (2002), *Fi Jamaliyati Alkalima*, Ittiḥad Alkuttāb Al'arab Publisher
45. Lyons, Christopher (1999), *Definiteness*, Cambridge University Press
46. Nasef, Hefni, Tammum Mostafa, Diab Mohamed, Omar Mahmoud, Bik Muhamed Sultan (2005) *Qawa'idu Allughati Al'arabiya*, Maktabat Aladaab Publisher

47. Ryding, Karin C. (2005), *A Reference Grammar of Modern Standard Arabic*, Cambridge University Press
48. Wako, Tawa (1993), Interpretation of Definiteness: with special reference to Japanese, *Word Journal of the international linguistic association*, vol. 44, no. 3, pp. 379-396